

史料紹介 森本州平日記 (七)

東京大学大学院
日本近代政治史ゼミ

はじめに

ここに紹介する森本州平日記は、一昨年刊行された『東京大学日本史学研究室紀要』第二七号(二〇一三年)に掲載した「史料紹介 森本州平日記(六)」(一九三一年一月から三月までの日記の翻刻)の続きにあたる。昨年刊行された『東京大学日本史学研究室紀要』第一八号(二〇一四年)では、諸般の事情により、三〇(昭和五年)九月～十二月の日記を翻刻した。日記の年代と掲載の順序が前後したことで、読者並びに関係者の皆様にはご迷惑をおかけした。改めてお詫び申し上げる。なお、過去の「史料紹介 森本州平日記」については、東京大学学術機関レポジトリ (UTokyo Repository) によりインターネット上でも利用できる (http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/bulletin/#77-15) ので、ご覧いただきたい。

日記の書き手である名望家森本州平(一八八五年～一九七二年)の関

歴については、神戸大学名誉教授須崎慎一氏の「史料紹介 森本州平日記(抄)」(神戸大学教養部『論集』三五号、一九八五年三月)に詳しい紹介がなされている。そもそも、当ゼミによる筆耕は、須崎氏が永年従事されてきた貴重な仕事を引継ぐ関係にある。昭和期に森本州平が当主をつとめた森本家は、長野県松尾村(現飯田市松尾)の旧家であり、森本家に伝来した文書の詳細については、飯田市歴史研究所編『飯田下伊那地域史料現況記録調査報告書1 飯田市松尾新井森本家(大森本)文書』(二〇〇八年)、同編『史料で読む 飯田・下伊那の歴史1 松尾大森本の家と周辺の社会』(二〇〇九年)をご覧いただきたい。本号所載の日記の解題として、特に、下伊那地域における国家主義運動の進展のさまに焦点をしばって書かれたものが、本号所載の佐々木政文「愛国勤労党南信支部組織準備会の活動と反資本主義思想」である。併せてお読みいただきたい。東京大学大学院日本近代政治史ゼミの参加者は原則として全員筆耕にかかわった。中西啓太、團藤充己、樋口真魚、池田真歩、佐々木政文、水上たかね、梅本肇、賀申杰、吉

田ますみ、アン・ジェイク、石野夏幹、崎島達矢、佐藤大悟、の諸氏である。また、学部生からは、佐野健介、塚原浩太郎、増田由貴が加わった。語句の説明には、團藤、梅本、賀、吉田、アン、石野があった。日記の翻刻にあたっては、漢字片仮名表記を漢字平仮名表記に改め、旧字体は原則として新字体に改め、不明文字については□で表記した他、可能な限り原文に忠実に起こした。なお、ごく一部、森本家にかかわる私的な記述、個人に関する評価にかかわる記述などについては、〔前略〕、〔後略〕として削除したほか、***などにより伏せ字扱いとした。

最後となったが、日本近代政治史ゼミの時間において森本州平日記を読み翻刻する上で、何の制約も課されず自由に使用する許可を与えてくださった森本信正氏にお礼申し上げる。また前回同様、今回の筆耕にあたっては種々の便宜を与えてくださった飯田市歴史研究所の齊藤俊江氏にお礼申し上げます。(加藤陽子)

森本州平日記 一九三一(昭和六)年

四月一日 水曜

雨曇。組合支所に青山江塚と共に来て、四日の惣代会に対する対策と同日の役員会とに関する打合を行ふた。専務より、昨朝熊谷平一、佐々木善助の兩人来り、先日の役員会の委員を挙げる件は同意し難しとの事に、然らば来る四日午前中役員会を開らきて相談すべしと話しして帰したり。依て四日午前中役員会を開きたしとの申出に付て、却て午前中開きたる方得策ならんと。依て役員会を午前中開く事として種々打合をなし、総代会に於ての多条繰系機備付の経過及其の現状に至る迄の件につきて充分なる打合をなし、予は多条繰系機備付の動

〔機〕及村経済の状況に付て話し、専務が経過を報告する事とし、質問に先して我より一般の誤解せる点に付説明する事として午後上飯、銀行出勤す。

頭取長野より帰りて出勤し、不在中の件々につき報告し、増田を伝馬町支店に移す事等につきても打合をなしたり。銀行の経営難及組合の多条繰系機設置に関する問題等難問題交々起り、胸中悶事多し。併も難局に際して泰然として動せず。飯田町舗装道路に付広小路と知久町と争となる。

予記 女中なく家庭忙はし。日雇人足一日弁当付五十銭入。三十五銭となる。繰系始め。

【語句の説明】①多条繰系機：普通繰系機よりも繰系緒数が多い繰系機で、繰系工員が立つて作業する立繰式。普通繰系法に比べて繰糸速度が遅く、高品質な生糸を生産することができる。

②頭取：大平豁郎。在郷軍人会下伊那郡聯合分会長。百十七銀行頭取。

四月二日 木曜

晴。床を離るゝに忍びず身体倦怠を覚ゆ。組合銀行共に種々の問題幅奏し来り。安心して寝に付く事なし。世相又悪化し生活難と社界苦と重なり来つて、益々苦慮する事多し。又其禍中に入つた予は面白からざる事のみ目のあたり見る。

午後三時より聯合事務所に猶興社の世話人会を開き、出席して、世話人五六名集り、猶興社の将来につき事業につき祖国の現状の憂慮すべきに付て物語り、来る四月十一日中谷氏を聘して猶興社総会を開くべく話し、猶興社の形を如何にして進むべきかに付充分打合せて夕刻に及びたり。

四月三日 金曜

晴。終日家居して静養す。夜に入りて組合蚕品種統一の為蚕種家の会同を本所に求めて、来会者と品種の批評を乞ひ且又配付手続代金接受に付ても打合を行ふ。村内蚕種家皆之を徳とし充分意見の交換をなすを得たり。

夜十一時帰宅す。風邪の気味にて頭重けなり。耕地集会所二月末より工事中なりしか、先月廿五日建前出来雑作中なり。資金は青年より半額耕地費積立金より半額を出す筈なり。

【語句の説明】蚕品種統一：長野県および県の蚕種同業組合は、生糸の品質改良および製糸能率増進のため、一九一九年から奨励金の交付対象となる奨励品種を選定、統一して養蚕家に製造させた。

四月四日 土曜

晴。午前八時から組合と役員会を開く事としたので八時半頃支所に行つた。昨夕来つて泊つた大久保正夫、田中行雄の兩人を連れて吉野福一と小林八十吉の両氏を紹介して連れ出した。

午前九時から役員会を開いて蚕品種統一問題に付て原案を示して協議した。種々の論もあつたか、大体に於て原案を協議事項として惣代会に呈出する事とし、猶伊那社問題に付て報告した。伊那社が聯合会として約壹万円の予算を以て製糸指導、蚕品種規画統一、調査の三事業を行ふ事に決した事を告げた。

午後の惣代会対策も講じたが、佐々木善助から増沢多条機を購入の時の相談に預らなかつた点を不満とし、是非相談して貰ひたいと希望を出した。又希望として多条繰機は一工場へ据付られたしとの希望も呈出せられた。午後惣代会に望んで繭価時価算定案には秋蚕を二期に

分つと云ふ様な論もあつたが、結局原案通りとなり。予は蚕品種統一案も秋蚕一種のみ訂正あり。他日規定を造つて惣代会の承認を経る事に話つて後、予は一般村経済の大勢と製糸事業と詳細に亘つて説明を試み、多条繰糸機の採用の経過より動起「機」に付て説明し、最後に之れは村経済を破綻より救ふの道は之れのみだ、要は組合員に一文も多分配をしたいとの微衷から出た事だと結んだ。

予記 青山専務より増沢機購入迄の経過を報告し種々の質問があつたか、最後に竹村要人は役員協議のまとまらないものを惣代会にかけられても致方なし、役員会をまとめられたしとの議に賛成し閉会とせり。伊原五郎兵衛来飯し午後四時より重役会あり。遅れて出席す。銀行の急を救ふべく相談したるもまとまらず終る。

【語句の説明】①吉野福一：猶興社の発起者。龍江村の教員。

②伊那社：有限责任下伊那生糸販売組合連合会伊那社のこと。一九二〇年五月に下伊那郡二十七組合が加入する形で、繰糸の指導・生糸の検査の後、共同出荷することを目的として結成。一九三二年に生産生糸の全てを伊那社に出荷する合同出荷を実現。一九三四年一月に解散。

③増沢多条機：増沢商店が製作、発売した増沢式繰糸均斉多条繰糸機を指す。一九三二年九月まで三千七百七十八台が販売された。

④秋蚕：あきご、もしくは、しゅうさん。特に七月下旬から晩秋にかけて飼う蚕。松尾村では明治十年頃から秋蚕飼育が開始され、明治二十年代に定着、三十年代に入ると収穫高で夏繭を超えた。南信地方では春、夏、秋、晩秋の四回飼育した村が多い。

⑤竹村要人：村会議員、松川入山林組合議員。

四月五日 日曜

曇雨風。一日静養すべく床をとつて臥床して居た。各方面から来る雑誌殊に「祖国」「国本」等の国家主義の雑誌を枕頭に置いて読んだ。現在の日本、将来の祖国の如何に進むかに付ても樂觀は出来なかつた。澎湃せる共産思想に対して、如何に祖国が何処へ行くかに付ても憂ふべき種であつた。

父は毛賀の法事に招かれて行つた。信也は飯田へ、尚夫と下男は礫を天龍川より運んで水裡の石垣の修理材料とした。用石は太一に父の計画によつて運はせるべく命したが、一向に寄せる気配はない。

午後二時頃突然タケノが越後から帰つて来た。親の病気を心配して先月廿六日に暇を遣はして帰国したが、越後の婦人の労働振を見て帰つて来た。梨やチマキを土産に買ふて来た。越後の者は正直でよい。

晩に蚕種家を本所に参集せしめて、組合の蚕品種統一に付き相談して大体腹案に賛同を求めた。案は上記の通り。組合の工場統一問題多条練糸機設置問題等につきても進ませる事に決心した。

予記 蚕品種統一案。一、春夏秋共二種宛。一、共同購入の法方〔方法〕による。

【語句の説明】①「祖国」…一九二八年十月一日創刊。北吟吉主宰の雑誌。

②「国本」…吉野作造の「新人会」に対抗するものとして、一九一八年六月に上杉慎吉、天野辰夫らが東大内に結成した国家主義的団体「興国同志会」の機関誌。一九二二年一月創刊。「興国同志会」の一部はのちに平沼騏一郎を迎え、一九二四年に「国本社」を創立した。

四月六日 月曜

山は雪、里は風と雨。組合支所て青山専務と新入場採用の件につきて相談した。尚、過日の惣代会に於て竹村要人か提案した「役員間に於て何処へ練糸機を据付けるかの決議も見ないものを、惣代では詮議は出来ん」と云ふ事は最も妙点で、役員の間にも充分反省した事であらうと云ふて居るので青山と話し合ふた。

村長が何か用があるから役場へ来いと云ふので、青山と二人で役場へ行つた。村長と助役か居て、多条練糸機に付て、近来中々々ケ間いのでどう云ふ訳かと問はれたので、多条練糸機購入予約等について村長に委細話して、ワカラズ屋か役員の内にも居て部落をオダテルので仕方かない、計算上から見ても工場の統一は必要であるし、農村不況対策としても之より大なるものはないと話したが、村長はヨイ事だが却て六ヶ敷いとの話あり。次で低利資金の運用法方〔方法〕を話して、其の了解を求め、万一支払免除になりたる時は組合と役場と半分宛分配する事を約す。村長曰く、竹村近來組合の悪口を云ふと聴けり、注意ありたしとの事なり。

午後上飯。銀行出勤し、頭取と検査及其他行務に付、打合せたり。松沢数一來行し、信聯預金を支払の保証書を差入れる事を約す。重役連席。

予記 風越山雪降り、寒氣増す。桜二分咲き初めたるに風に雪チラ〜。受信 藤田盛蔵退役。高橋泉退役。

【語句の説明】①村長…当時の松尾村長、吉川亮夫。県會議員選挙に三回当選。

②信聯…有限責任長野県信用組合連合会。

四月七日 火曜

風雪。桜桃咲き初めたるに寒気増し、風と共に雪降り山には積雪多し。風邪の気味頭重けれども、頭取欠勤すれば予は朝出勤す。

北河原地所の耕地整理の件にて、丸岡屋を連れて太次郎と父と検聞す。太次郎、初太郎等か小作し居る柴畑を田地となさんとする企なり。父も鶴弥の説に耳を傾けて居たり。

それより銀行出勤。貸付金取立出来ず預金引出一方にて、貸付担保を支店より集めて安田にて借入金策を尽す。不安の念止まずと雖も平静を装ふ。

放課後、龍翔寺を借りて来る十一日午後一時より猶興社総会を開くべく決す。龍翔寺に借入方を頼み承諾を経たり。猶、西上柳に千代田生命保険代理店千代田商会の総会あり。関島と予と出席して、決算書を見、現金及帳簿一切を点検したり。年額政雄の収入七八百円位なるべし。夕食を饗せられたるも、自動車時間に忙はしく、七時帰宅す。咳出て頭痛せり〔後略〕。

予記 増恵、山本行。
社会の今日 首相再入院。

【語句の説明】①龍翔寺：飯田町傳馬町にある臨済宗妙心寺派の寺院。

②千代田生命保険：慶應義塾の塾頭、教頭をつとめた門野幾之進が、辞任後、一九〇四年に創業した生命保険会社。慶應義塾を背景に急速に成長した。

四月八日 水曜

晴風。風邪の気味で発熱し頭痛も伴ふたので、静養する事とした。数日前から風邪の気味ではあつたが、銀行組合共用務の併も重要な業務が輻輳して居るので押して出勤した。

今日静養して横臥すれば、枕頭に堆き雑誌等取り出して読む。「国本」「祖国」「原理日本」回天時報等、皆憂国の文字のみ。心は国家の前途満蒙の野にはやれとも、病体を如何ともし難し。憂国団体猶興社総会通知だけは出す事とした。銀行も今日は頭取が帰る予定なので、何とかなるであらふが、経済界、銀行の事等は関する事の少ない頭取の事であるから心にか、らん事もない。猶興社の総会には中谷武世氏も来飯するので、それ迄には必ず本復することと決して、悠々自適する事とした。〔中略〕*も、勸業銀行から督促状を〔後略〕。組合製糸部委員会ありたるも青山に頼んで欠勤。

予記〔前略〕「一日作さゞれば食ふ可らず」百丈の言は古今を一貫して居る等と寝て考へた。

発信 猶興社総会通知。
受信 産業部会。

社会の今日 国家の不祥事迫る如く予感せらる。

【語句の説明】勸業銀行：正式名称は日本勸業銀行。一八九七年六月、前年公布の日本勸業銀行法に基づいて設立。不動産抵当による年賦貸付け・定期貸付け、および公共団体に対する無抵当貸付けを行い、農業・工業の改良発達をはかることを目的とした。

四月九日 木曜

快晴。風は寒かつたが快晴。朝の中は無風であつた。頭痛かするのと、発熱か卅七度七八分あるので静養した。昨日と同じく憂国の文字を読んだ。祖国所掲の沖、横川両志士の記事は涙なきを得なかつた。惰夫を奮起せしめ、国を忘れた現代青年に喫せしむるには好説物の一つであつた。

信也か夜行で東京へ遊学の途に出発した。午後四時頃、増恵か山本から帰宅して、信也遊学の行を壮にすべく山本から貰ふて来た山鳥を料理して、父母兄弟等と晩餐を共にして勢よく出発した。

今日午後一時から、弁天堤防で、軍人会新井斑では忠魂碑の福島大将揮毫の額を作つて花見をするので招かれたが、病床にあるので行く事が出来なかつた。酔ふて南の路を大言壮語して通る軍人の聲が耳に入つた。軍人連中の花見はよいが、日清日露の戦の殉国者の心は忘れない様にしたい。今の軍人には忘却者が多いのは憂ふべしだ。

【語句の説明】①沖、横川両志士の記事：『祖国』第四卷第四号所収の論説「沖・横川の死」（永江亮一執筆）のこと。一九〇四年にロシアで実施されたスパイ活動に従事した兵士たちの功績を称えた記事。

②福島大将：福島安正（一八五二～一九一九年）。明治～大正時代の軍人。長野県出身。日露戦争では満州軍参謀。のち参謀次長、関東都督。一九一四年陸軍大将。

四月十日 金曜

快晴無風。今日も終日就床して、雑誌類を枕頭に並べて読む。組合の事、銀行の事等交々吐（吐）裡に往來す。稀有の経済界の難局に乗り出し、進退両難とも云ふべき窮地にあり。組合も江塚前組合長の放漫政策の後をひきうけ、進路困難なり。無産の者に多額の貸付を行ひ、之れが回収には困難なり。只、江塚か空名をなすに急なる余り、無信用の者に多額の貸付をなしたる点に付き、彼の行跡を難するものは少く、却て後継者に罪を帰するもの多し。単に石原氏のみ其辺の消息を知るのみ。松尾村民多しと雖も、眞に村の事を憂ひ慮るもの少し。

〔中略〕細井平洲、春風桃李色…の五言絶句を取出して懸け、蘭亭曲水の昔を偲ぶ。

予記 銀行組合共欠勤。
受信 大平豁郎

社会の今日 浜口首相再入院再手術の結果辞職と決し政海〔界〕忙。

【語句の説明】①細井平洲：江戸時代中期～後期の儒者（一七二八～一八〇一）。中西淡淵にまなび、江戸に嚶鳴館をひらく。出羽米沢藩（山形県）の世子上杉鷹山の師となり、藩政改革、藩校興議館の創設に関わる。藩校明倫堂総裁。

②蘭亭曲水：中国東晋の時代、蘭亭において、王羲之が文雅の士らと曲水の宴を行ったという故事。蛇行する川の上流から杯を浮かべて流し、杯が自分の前を通り過ぎるまでに詩歌を詠むことを曲水の宴という。

四月十一日 土曜

雨。御真影の交替せらるゝに付、小学校迄見送方村より申来りたるも、風邪尚癒えず引籠りたるに付奉送申上げず。父学務委員として出向す。

午前中マツ来りて按摩せしむ〔中略〕。次で銀行に出勤す。金田、吉川、井村検査に向向して不在なり。店頭閑散なり。取締役全員（山口氏を除く）の加判をなして信聯へ預金払戻の保証書を差入れたり。松沢来行して談をなし保証書差入たり。期限昭和六年四月十一日より同十一年四月十日迄とす。蕉悟堂に中谷氏を訪ふ。

龍翔寺に於る猶興社総会に列す。中原を司会者とせしも中途退き、予代りて司会せるに猶興社の政治的団体なるや否や、勤労党を支持す

るや否や、別に勤労党を作るや否やに付て種々議論ありしが、結局支持する事とし、準備委員として十名を挙げ、予と中原は後見役となる。予は今後若し政党と猶興社をなすとするも既成政党の如く選挙団体たるに止らず社界、教育、風教、思想、経済総ての問題に付政党的に動くものなり云々と説明す。龍翔寺の会議は意外に政治的団体進捗たり。午後三時より九時半に至る。蕉梧堂に引上げ粥川、吉野、岩崎等と帰る。夜十一時に及ぶ。

【語句の説明】蕉梧堂：明治期からある飯田の旅館。高台にあり眺望がよく、著名人らが宿泊した。

四月十二日 日曜

曇晴。風邪の気味未だ全く治せず。併し組合に於て午後より役員会を召集し置きたれば午前十時頃出頭す〔後略〕。

午後二時より組合本所に於て青山専務と打合をなし会議に臨む。案は多条練糸機設置場所工場統一問題に付てなり。併も、若し本所へ据付けるとせばタンク修繕として二千七八万円を要し、猶水路を拡張するを要する事となるを以て、予め予定を以て本支両工場比較表を作成する事とし、種々談合の結果、第一工場水路を検し、来る十八日午後より本所製糸部委員と惣代との合同研究会を開き、統一問題及多条練糸機等につきて懇談研究し、理事の背後にある勢力に付理事の力のまとまらざるか故に理事の背後にある諸君と充分熟議するの要あり。故に研究会を開く旨を告げて研究する事に決す。

帰宅して居る時、蕉梧堂より電話ありとて吉野、岩崎、座光寺、今村より申込来りたるも風邪の為行かず。

予記 指導員会あり中谷の講演ありたるも風邪の為欠席す。指導員会

の後にて中谷を中心として猶興社及其将来に付、吉野、座光寺、岩崎等研究し、南信勤労党を作る事となし、予に引退して後方勤務にせしめ中原を立て、委員長とすとの事に決せりと。

【語句の説明】今村：今村良夫。川路村の人で国家主義運動に参加した。猶興社発起者、愛国勤労党南信支部組織準備会執行委員・機関紙部役員。

四月十三日 月曜

曇。蕉梧堂に中谷宿泊し居り、吉野、今村、岩崎、中谷を中心として愛国運動を政治的に進捗せしめんとし謀議せり。午前九時に来れと云ふので行きしも、岩崎も吉野も来らず。中谷大に怒り此の如き事にては愛国運動は出来ずとの事に兩人を大に叱責せり。今村は県の社会課より矢富氏来郡したるを天龍峡視察旁々訓練所視察せしむる事とたるが今村来らず。矢富氏と蕉梧堂で面会し作興会と思想問題及青訓との関係を話し、尚中谷氏の同志なりとて猶興社に付猶興社を如何にすべきか、吾等の愛国運動を如何にすべきか等につきて話合ひ、結局中原を起たしめて南信勤労党を作る事となり（座光寺、今村等主張）書記長座光寺なり。之の両氏を握手せしむべく中原を招きて其決意を促し、遂に中原の決意を見るに至り、其の準備委員会を来るべき天長節に開く事とし、種々中谷の憤激督促に会いて之を決したり。

午後八時半発にて中谷去る迄随分激論も又余を悪罵する様の事もありて談笑裡に愈々政党として此運動をなす事となり。釋々と分れて帰る。

予記 中谷曰、青年は予に付てはブルシヨアなる事、思想の故き事、

容態の点等につき共鳴なし。然るに中原は青年の人気を一身に集め居れば中原を立て、君は田円〔園〕に帰りて村夫子たるべしと中谷は予に忠告せり。

【語句の説明】①矢富氏：弥富元三郎か。県社会課の職員。社会課は、社会事業係と社会教育係からなり、青年団に関する事項などを担当した。

②作興会：下伊那郡国民精神作興会のこと。一九二四年十月に思想善導を目的として発足。理事長には北原阿智之助（上郷村村長）、専務幹事には森本州平が就任した。教化事業として講演会や活動映画巡回等を行ったが、次第に影響力を失い、一九三三年に森本ら幹部が有名無実方針を決定した。

四月十四日 火曜

曇晴。銀行出勤す。正午福住を訪問して久闊を述べ。聯合事務所に於て製糸組合大会準備委員会あり。出席せり。銀行は極めて店頭閑散なり。

放課後南信勤労党組織準備委員会あり。青年吉野岩崎座光寺其他数名参集して準備委員として中間に入れるべきもの、数を調べたり。猶議事としては大会の用意等につき打合をなし、予は顧問として次の事を注意せり。一時的の景気により動くべきものにあらざる事。二、猶興社の外廓運動として必要なる事。三、吾々の運動は他の従来の政党にあらずして社会問題、教育、風教、産業、思想等人事全般の問題に付、一団となりて運動する団体なる事を明にする事。四、其運動は腰弁当、草鞋かけの意気を持つる事等を話し、かくまでに至りたる中原氏の決心を岩崎より話あり。次の準備会迄に小委員会を開く事を打合

せて十時散す。銀行の宿直部屋を其の室に充てたり。社会の今日 若槻内閣出来たり。

四月十五日 水曜

晴。桜満開なるも不景気の為花見の人も鮮し。

長野県製糸協会大会があるので朝九時に飯田へ行く。組合役員全部八幡より出向の筈なりしも、予は昨夕の盗難事件にて受持巡査二人来り取調たれば遅れて家に居る。盗難の届出をなさしめ重なる盗難品左の如し、一、御大典徽章二、一、町村長会表彰時計、西洋カミソリ、安全カミソリ、小ズカ、軍人徽章等、雑品多く多分孝一の所業ならんと見当をつけたり。果して彼の所業にて大部分の品はありたるも徽章は見当らず。

午前十時より組合製糸協会大会は開かれ、予は余興委員として参加したり。松尾組合役員も殆んど全部出席せり。

午後五時迄に予定通り進行し、午後六時散会後役員を連れ児島牛肉店に入りて夕食を喫し、再び仙寿楼の夜会に出席す。水井登業試験場長及加藤中央金庫理事に酒間面会す。大平久男、原森穂と会見して伊那社問題を論ず。大会では平野新夫人の筑前琵琶は最も人気を集めた。受信 館林政治

【語句の説明】①御大典徽章：一九二八年、昭和天皇の即位式の際に造幣局が製作・販売した記念章のことか。造幣局はこの年、即位式記念賞牌類を製作し、三越百貨店を通じて販売した。

②軍人徽章：在郷軍人会の徽章か。在郷軍人会員は、会員等級や役職に応じた徽章を佩用していた。

③仙寿楼：松井仙太郎・大竹仙十郎が創業した飯田に存在した料亭。

四月十六日 木曜

晴。組合支所で製糸協会の序を以て来訪せる視察員二木洵以下数名の視察員に応接した。午前中此の応接の為に費し藤岡は来訪しなかつた。来訪する予定なので待ちうけたか遂に来らず。

正午出勤するの止むなきに至つた。銀行と組合と両方のかげ持、之れを如何にすべきかは遂に困難な問題で、自分ながら銀行業の適任でない事、商売のつらい事等は胸裡に往來した。何とかして此商売の困難桎梏から逃れたいと願ふて居たが、逃れる路を見出す事も出来ず今日に至つた。銀行は或る時期に逃出すの肚は定まつて居たか種々の關係と今日の金融界の現状とを見る時逃げる事も出来ず。徒に両兎を追ふの愚を行つた。

午後から組合製糸協会の後始末として仙寿楼で宴会を行ふた。県の奥原や杉原も来た。午後九時迄宴をして散会した。種々の問題の輻輳の為頭か鈍り気分も爽快でなく鬱々として居た。咳も痰も出た。

四月十七日 金曜

晴。御親影^{（おやかげ）}を奉迎すべく午前十時半小学校に集つた。

四月十八日 土曜

晴。午前九時から本所で役員会を開いて午後の実行班長、惣代、製糸部委員同合の会合に対する対策を練つた。先づ本支所統一の経済的計数問題を議したが、結局機械繰糸による二部制採用とし、この工場統一問題に付組合事業の合理化としては工場統一によるより他なしとの結論に到達し、之れを以て今後の同合会に望む事とし、種々の目論見表を作製して之を壁上に掲げて公示し最後の態度も決すべき重要な

る合同会に望んだ（此問題は当組合の浮沈の分れる大問題であると同時に本年初より起つた大問題であつた）。先づ予は会開の辞として此会開を開くに至つた事を述べて、「工場統一には役員全部必要は感して居るか、其背後の輿論に左右せられ時期地域に關しては何とも論ずる事か出来んハメになる事を話し、此際感情行か、り等を捨て、組合精神に基き考慮せられたしと述べたり。

会議始まりて一、二質問応答の後、竹村要人変事起りたればとて遠足小学校女生徒五名松川プールに於て奇禍にか、り水死したりと報告したれば、直に会議を中止して飛び出せしに自動車に乗りて見舞に行くと。現場に達すれば各死体にとりつき叫喚混雑なり。

予記 石原、竹村、福島等村議も居りて遂に死者を学校へ送り返し自宅へ取引せしむ。直に学務委員、村会合同会を開き夜に至る迄会議し廿二日校葬と決す。

【語句の説明】松川プール：一九二五年、鼎村の本田亥太郎が私有地を提供し、松川の水を引き入れて作られたプール。ただし、日記に記載されている女子児童が水死した事件は飯田村にあった風越プールで発生したものである。

四月十九日 日曜

晴。弁天遊船会の解散式をやると云ふので（浜島孝一から八釜しくホサイテおる）父か中心となつて居るので之か助手をして解散する事とし、沢柳と父も往復して解散に決し、清算をして残金を配分する事とした。

組合へ行きて青山専務に聯合事務所行を頼んで工女を連れて表彰伝達に赴かしめ、自らは学校に於ける村会学務委員同合協議会に臨んだ。

午前十時より午後六時迄校葬に就て相談した。新聞広告から、葬具の注文式場の設備準備其他に付式の大体を決した。

終日此の校葬の為に終つて後、夕刻平栗棘蓬を毛賀関の病院に訪問した。彼は弟の銃で足を打ち負傷して入院治療中であつた。生鯖三本を贈つた。

支所で奥村商店員秀島の来訪をうけて彼と会見した。秀島は蚕糸業に付ては大悲観論者であつた。蚕糸業の将来は実に暗黒であつた。此れは単に我郷土のみならず我祖国の産業全体の大問題である。「若し生糸が外国へ売れぬ様になつた時の吾産業を如何にすべきか」之れは常に考へき問題であつたけれども之に好適な解決案はなかつた。

予記 不在中宮沢彌や其他来客があつた。信也から日本陽明学派の哲学を送つてよこした。

【語句の説明】①弁天遊船会：一九一七年に弁天橋を囲む松尾村新井、喬木村伊久間、下久堅村虎岩の有志者が發起人となつて設立された。三艘の船を以つて竜峡下り探勝者を迎えた。貸切制をとり、弁天・天竜峡間一艘六円（後に六円五十銭）の料金で運営を行つていたが、一九三一年四月に解散した。

②宮沢彌：森本州平の義妹・敏の夫。

③日本陽明学派の哲学：一九〇〇年に出版された井上哲次郎の著作、『日本陽明学之哲学』。

四月二十日 月曜

晴。片桐事件にて斎藤龜次郎、忠三兩人及片桐一美示談の話に中介となり上京中なりしが、示談出来たりとて銀行へ架電あり。金田の解決案につき之を以て予が上京奔走する事となり夜行上京す。此日午前

中銀行にて金田と打合をなし条件左の通りなり。一、全部を貳万壹千円にて解決す。此内片桐六千円出金銀行より一万五千元出金する事、一、其の内容は斎藤龜次郎に一任し如何様になるも報酬は銀行としては出し得ざる事、一、全部示談書及押集物品領収の委任状及片桐亭次郎減刑の上申書等もらい全部解決する事を打合せして午後八時半出京す。代田弁護士同伴。

午後帰宅し父と相談して小学校児童の父兄へ金五十銭宛見舞として送り、予は之れが見舞として各戸（六）を訪問せり。吉本屋仮葬に会葬して後、小学校に於て石原、龍門寺和尚と廿二日の校葬の次第及式場に関する打合を行ひ準備万端を整へ置きたり。

【語句の説明】①片桐亭次郎：前年の一二月に百十七銀行から担保金十九万円相当を盗んだ人物（「片桐事件」）。一九三一年六月四日に懲役一年二カ月の判決が下された。

②龍門寺：松尾上溝にある瑞雲山龍門寺のこと。一四七二年に、高森町下市田生まれの文叔禪師が開山した臨済宗の寺院（ただし、開山の時期や祖については諸説ある）。

四月二十一日 火曜

晴。汽車中よく眠りて朝代田弁護士と共に駿台荘に入りしが、また最階下の室に案内せられ鬱々として止ます。斎藤等来宿し居れば片桐斎藤等と会す。隣室に居れば都合よし。斎藤の言によれば示談は金田の言と異り全部解決せず、単に越賀商店のみ一六〇〇〇円にて解決し、今日三浦博士事務所にて和解の書類及残金の受授ある筈に付、之を承知せられたしとの事なれば、然らば他は如何と云ひしに、他は全部にて二、三〇〇〇円ならては如何ともし難しと云い、然らば猶金田の言

との間に差異ある旨を答へしが、結局斎藤の言を容れ、銀行と片桐かこれを負ふ事になり、銀行一万円、片桐六〇〇〇円を出し、片桐よりは証書を取り二万円を安田B八重洲橋支店にて名川保雄氏同伴受取り、三浦弁護士事務所にて片桐一美、予及越賀主人三浦、川和弁護士代田、中込の三氏立会の上契約書類の取替をなし、午後五時頃駿台荘に引揚げたり。

片桐よりは出世証文を受取る約束をなす。他の二店は交渉中なるもまた決定せず。進藤最も困難なるらし。斎藤も銀行側より二万二千元出金せしめて解決すべく忠三亀次郎兩人奔走中なり。

【語句の説明】①駿台荘：長野県出身の犬塚雪代が経営する旅館。一九二六年創業。著名作家の投宿先として知られた。

②安田B：安田銀行。一八八〇年に安田卯之吉が設立。その後、おもに東北地方に支店網を拡大し、一九一二年に株式会社となる。一九二三年に第三銀行、安田系十一行と、戦時統制期には日本昼夜銀行、昭和銀行などと合併した。一九四八年、行名を富士銀行と改称。

四月二十二日 水曜

雨。小学校庭に遭難小女の校葬を営む日なり。

雨そほ降り駿台荘のとり乱れたる再〔最〕階下の室に明けたり。午前中は斎藤忠三、亀次郎の兩人、仲買人進藤、久保田両店に付交渉を進め居れば閑を得たれば、代田氏と共に博物館見物に行く。岩佐勝次の龍席の画幅立派なり。尚陶器を見て午前中を費し竹の台に文人画、書の展覧会を見る。近代の書家多く陳列せるも書は支那人に及はざる事遠く、参考品中に北村雪山、及〔頼〕山陽の書あり。其他支那人の書あり。

一覽して出て琅玕洞にてシノ焼及其他二種の皿を買ひて名川弁護士を訪問すべく代田氏と共に行き、斎藤等の示談進行状況を見るに進藤の方は示談まとまらざるもの、如くなるも、久保田の方は出来そうなり。依て続いて話の模様を聞くに久保田二一七五円（内片紡北沢喜秋名義のもの一〇〇〇、北沢千里名義五〇及正金十株にて一〇〇〇円と話したりしも、遂に猶一七五円銀行にわり申て呉れるなれば示談出来る由を聞き之を諾したり。

夕刻名川事務所より帰りて白梅円に宿泊すべく中原と打合して白梅円に行。中谷氏白梅円に來り中原と共に種々党の事に付話す。国難迫り国歩愈々艱難なり。既倒に回らすべく画策す。尚白梅円にて神戸岡田等の産業組合関係の人士に會す。

【語句の説明】①岩佐勝次：岩佐勝重（？）一六七三年）か。越前福井藩につかえた江戸時代前期の画家。

②北村雪山：江戸時代前期の書家（一六三六～一六九七年）。北島雪山とも。肥後熊本藩の儒者をつとめたが、辞任して長崎に移住。近世唐様の祖といわれる。

③山陽：頼山陽（一七八一～一八三二年）。江戸時代後期の儒者。大坂出身。江戸で尾藤二洲らに学ぶ。詩、書に才能を發揮。幽閉中に起稿した「日本外史」は、幕末の尊攘派につよい影響をあたえた。

④白梅円：白梅園。東京市田端にある旅館。

四月二十三日 木曜

曇。白梅円に宿泊し中原と共に起き出て、中原は在郷軍人会務にて出向し、予は駿台荘に來りて代田斎藤等と打合せて先づ名川弁護士より仲買店へ出向する事を約して、午前中閑を得たれば三井物産に下

田文一を訪問す。

別に用談なければとも久しふりにて話す。昼食を寿司屋に入りてとり、下田より饗をうく。

別れて名川氏の事務所に行けはまた誰も来らずとの事に駿台荘に帰り、送金壹千円を受取りて(安田八重洲橋支店より)再び名川事務に行き代田斎藤等の一行五名と合し、中込氏を介して久保田商店に至る。既に久保田商店は斎藤等の奔走の結果二一七五円にて解決した事と聞き、店の二階に案内せられしが、顧問弁護士小山氏の所へ行けとの事に取引所の五階に小山氏を訪ふ。然るに小山氏は金額の事に付不服を申し立て、示談の意志なき旨を答へたれば、一行皆憤激し話は決烈〔裂〕せり。尚斎藤等は久保田商店に立寄り談判せしも、中込氏を拉して一行築地支那料理に招して一行と夕食をとる。

中谷、中原両氏と会见し天野氏を病院に訪問する予定なりし故、予のみ辞して帰り本郷神保病院に天野氏の病氣を訪問す。天野氏は五日計り以来胃カイヨウにて入院治療中なりしも、勤労党の指導原理をときて(病床にありて)止まず、種々中原、中谷両氏に打合をなして、夜行にて十時半帰途に付く。信也飯田町駅迄見送に来。

【語句の説明】①下田文一：昭和期の実業家(二八八六—一九五一年)。

長野県生まれ。三井物産に入り、台北支店長代理、ニューヨーク支店、本店業務課長、奉天出張所長となる。後に南洋開拓理事、満州炭鉱常務理事などを歴任。

②天野氏：天野辰夫(一八九二—一九七四年)。大正・昭和時代の国家社会主義運動家。静岡県浜松生まれ。東京帝国大学独法科を卒業し弁護士となる。上杉慎吉に傾倒し、新人会に対抗する興国同志会を組織し、森戸事件に活躍。一九二七年全日本興国同志会を組織、

愛国勤労党の創立に参加。

四月二十四日 金曜

雨晴。朝八時半銀行着。金田原田及頭取に対して上京中の片桐事件に付て報告をなす。

昨夜眠られされは頭重し。然し組合に午後一時より実行班長惣代製糸部委員会を開き置きたれば、出席して去る十八日の経験会をなす。

蚕糸暴落の結果農村悲惨なる不況に面し、之れか打開策としては工場統一、器械繰糸採用、二部制等による外なしと話し、一切を一挙に解決せんとし、第一工場に対して修繕すべき用件及其経費等の概算を表示せり。丸山鏝三、福島国雄、市瀬某平沢某佐々木鹿三等より種々質問ありたるも、皆工場統一問題は本所に統一せられん事を希望し、大体の空氣を察するに機械繰糸に付ては異議なきも、支所に統一するは不養成の向多く結局研究に終り、午後五時半解散し終つて役員会を開きて研究したるに、此際工場統一は見合す事、試験機械繰糸取付に關する位置は他日研究する事、採用器械は尚一応研究の事に申合て解散し、尚上飯して勤労党の準備委員会に臨む。

龍翔寺に於て開かれたり。予は既成政党と勤労党との異なる点及既成政党の議会中心主義なるに反し、吾等は皇室中心主義なる事を説明せり。又其の執行方法は腰弁脚絆付にて運動する事を話したり。

予記 大体の空氣を見るに既成政党には満足せず。去りて無産政党は尚あき足らざるもの多し。併し資本主義を攻撃し資本家を葬るが如き論をなすもの多きを見る。大体の心持は通すれとも尚主義政策の点に於ては通せざるもの多し。

【語句の説明】①腰弁脚絆付：大したことなくとも積極的に臨む

態度を意味する言葉。

四月二十五日 土曜

曇晴。朝銀行に出勤す。貸付回収不能、預金引出の結果、手元現金欠乏、一般不景気、繭米価暴落、地方銀行に対する不安、片桐事件の百十七に対する不評等ありて、手元資金の欠乏に苦心す。頭取は県参事出県、金策の対策を講ずれども、施すべき策なし。平時に往々頭取の虚位を擁して居たるのみ。辰野支店長小原を招きて、解職する事を話し聞かせたり。伝馬町支店長に井村氏を任命せり。小原伝馬町支店長を辰野支店に栄転せしむ。其他、倉田氏を新任す。

午前十時より税務署に所得調査委員会開かれ出勤す。調査原案の提示をうけ、其の大体の説明を聞き取りたり。尚記入に当りては、特に雇人をして記入せしむる事とせり。調査委員出席し終つて、天龍峡ホテルに晚餐会を開き、夜十一時迄飲み舞りて帰る。此夜、龍門寺に小学校生徒（遭難）の追弔会ありたるも欠席せり。

金田をして上京せしめ、片桐事件解決せしむ。岩崎来行し、勤労党に付て種々打合せたり。天龍峡遊船会に関し、大衆新聞に記事出でたりとて父心配し、廿六日の解散式に関し配慮せり。〔中略〕其他遊船会解散問題等にて父大に心配す。慰めて此の戦乱時代に処すべき事を却て父に諭す。

発信 片桐寿退職通知の返。中谷武世来峡を乞ふ。

【語句の説明】①百十七：百十七銀行。一八八〇年、国立銀行条例に基づいて設立された飯田第百十七銀行が、一九〇八年に普通銀行に移行したもの。

②大衆新聞：信濃大衆新聞。北原亀二ら政治研究会下伊那支部（LY

しの後身団体）の幹部によつて、一九二七年創刊。

四月二十六日 日曜

〔記事なし〕

四月二十七日 月曜

曇。大雄寺から銀行へ出勤した。終日行務に掌執した。金田からも廿七日、全部片桐事件示談成立して帰行する旨を申送つて来た。

大雄寺の接心は、杉俣元や糸田等が居た。大休老師の室に参する事、僅に三回のみであつた。老師は久し振りに参したので手帳をとり出して予の姓名を記して、馬大師不安の則につきて見解を呈した処が刻られた。

夜も銀行から龍翔寺に於ける勤労党準備会に出席した。準備会の委員連中の内、座光寺其他新しい連中は、また吾々の日本主義が明瞭に徹して居なかつた。社会民主々義にあるもの、国家民主々義にあるもの、共産主義にあるもの等あり、共産主義に傾けるもの等多く、予が資本主義の捨つべからざるを説明せるに對しては不満の様が見え、予をしてブルジョアの権化の如く思ひ、却て不満の眼を以て見て居た。之に對しては、単に吉野、今村等が思想的に吾々と共鳴せるのみであつた。終つて大雄寺へ行つた。既に参禅は終了して居た。今村と荒川で夕食を共にし、同志連中の多くが思想的に社民的共産的にある事を語つた。

【語句の説明】①大雄寺：現・飯田市大王路。臨濟宗妙心寺派。一四八四年、京都妙心寺開山第九世の法孫一溪が開山。創設の場所は野底川右岸の破摩射場（現浜井場）の外であつたが、その後現位置に

移された。旧跡地は下大雄寺。

②馬大師：馬祖道一（七〇九〜七八八年）。唐の時代の禪僧。「馬大師不安」とは、馬祖臨終の際におこなわれた禪問答を指す。

四月二十八日 火曜

曇雨。銀行へ出勤した。大雄寺から出ては銀行に出席した。参禪に付、馬大師の面仏月面仏を提げて入室し、三回目にしてパスした。其見解は「何ともない」であつた。併して盧坐拄杖の則を次の考案として受取つて来た。午後講座へ聴きに行く予定の処、辰野支店事務引継監督の為、辰野支店へ出張して、遂に大雄寺の接心会には行かず、五日間の接心、僅に三回の入室に終りたり。

辰野へ午後三時着、支店に入り事務引継を見たが、小原安之助の貸付引継は綿密を極め検査の如し。夜九時迄かゝりて、行員を小原が招きて小宴を箕輪屋に開きたるに参加し、予は小原真一郎を招きて宴を催した。吉江章雄は銀行からの借金の事を苦にして飲まなかつた。行員一般に活気なく、鬱々として居た。其夜は箕輪屋に宿泊した。翌朝東京より勤労党支部準備大会に馳せ参する中谷氏を迎へく用意して居たのであつた。吉江は予が「君か貸付係として共同製糸の貸を起さず居た事はよろしくない」との言に多少の興賞を感じたと見へて、後から種々弁明をして居た。

【語句の説明】①盧坐拄杖の則：「露座拄杖の則」か。禪宗における露座と拄杖の修行のやり方・規範のこと。露座は修行者の実践徳目のひとつ、拄杖は僧が行脚や説法の際に用いることから転じて、修行生活を意味する。

②接心会：禪門において一定の期間、不斷に坐禪をする修行（坐禪

会）のこと。

四月二十九日 水曜

雨。朝六時に東京から中谷、福島両氏か、勤労党南信支部発会式（準備委員大会）に臨席するのを迎へく起き出て、辰野駅へ立つた。中谷氏か勢よく福島氏を伴ふて下車したので、迎へて箕輪屋に入り、朝食を喫して中谷に話し、下伊那のイデオロギー的な点及勤労党の主義政策に付て是非話してもらいたいとの註文を入れた。併して時間にして、飯田に向つて両人は去り、予は辰野にて両人を送りて上諏訪片倉会館に於ける名宝展覧会見物に入つた。諏訪法性兜、狩野三楽の屏風、石涛和尚の書等を見て、十一時辰野支店に帰つて小原新旧支店長の事務引継に立会つた。午後一時終つて飯田に帰つた。午後一時から開かるべき勤労党準備大会は、三宜亭に於て開かれた。会するもの三十名計り、吉野、座光寺、岩崎、今村等の奔走によつて会議等は予定の通り進み、中谷、福島両氏が臨席して中谷氏からは党の主義綱領に付て話し、福島は少年時代から左傾革命的にあつたが、日本歴史を見て日本の歴史の外国思想に卓越せる事を発見して、翻然日本主義を奉して愛国運動に身を委ぬるに至つたとの話をし、中谷は政治的には既成政党の議会中心主義なる事と天皇中心主義なる点、無産政党の唯物的にして君主制非認なる点、経済的には資本主義を止めて搾取なきものとする事、家族主義、産業の統制大権を天皇に置く事等を話した。予は顧問に推され、中原を委員長として進む事に決して他の役員を定めた。夜十一時迄話した。予は祝辞演説として、思想的に数年来尽した事、今日漸くに愛国運動が起つた事を喜んで、愛国運動には諸士と共に進む旨を話した。

【語句の説明】①片倉会館：片倉館。諏訪で製糸業を営んだ片倉家が建設した公共施設。一九二八年竣工。

②諏訪法性兜：武田信玄が着用していたとされる兜。『甲陽軍艦』に登場する。

③狩野三楽：狩野山楽（一五五九～一六三五年）の誤記か。織豊～江戸時代前期の画家。近江出身。狩野永徳に師事。のち大坂城など豊臣家関連の障壁画制作に参加。豊臣家滅亡で江戸幕府に追われたが、のちに許され、幕府関連の制作事業に携わった。京狩野家の祖。

④石涛和尚：中国、清初の画家（一六四二～一七〇七年）。明の宗室の出身。山水画に意想豊かな獨創性を示した。

⑤三宜亭：飯田城山伏丸跡に建てられた旅館。

四月三十日 木曜

曇晴。父は大衆新聞に出た記事が、弁天遊船会并に浜島孝一が盗に入った記事に付て心配した。前者に付ては小林某が記事を取つて父の晩年を毒すべく書いたのであると憤つた。又孝一の盗事件については訴出た事、其他万事罪の軽減を計るべきであつたと侮つて居た。昔堅気の父は新聞記事に出る事を大に恐れて居た。併し余は、今の時勢は昔の戦国時代である、人の口には戸は建てられぬ、新聞併も悪新聞の記事等は心配するに及はんと慰めた。

組合支所に入った。青山専務に面語すべきの処、会ふ事も出来なかつた。中原から電話で中谷、福島両氏が帰京するからとの事であるので、八幡から彼等の天龍峡より帰りの電車に同乗して飯田迄行つた。車中中谷氏と話した。彼は田中清の思想状態が国家社会主義にある事を心配した。予も亦同感であつた。飯田駅頭で両氏に分れて予は銀行

に出勤した。放課後、銀行の其日其日の無事に過す事に付て、原田、金田とも話した。危機に望んで大勢の行くか俣に任せるより外ないとの結論に到達した。

予記 勤労党南信支部の結成に付て、予は顧問に推された。岩崎等は予を推挙して党費を出さしむるものと解した如くであつた。他も同様に思ふた如くである。

五月一日 金曜

雨晴。雨降る。所得税調査委員松本に会合を通達あり、出席する事とし午前八時半飯田を出発す。電車中島岡、沢柳、野原、市瀬等会同せり、林も亦同行す。松本市商業会議所に於て打合会開かれたるも、其の議題とする所は極めてとりとめもなきものにて其申合としても又殆んど云ふに足るものなし。午後一時より開かれ午後四時半頃迄協議したるも、何のまとまりたるものなく、徒に遙に飯田より松本へ遊びに来れる観あり。上伊那の連中も亦会同す。独り訪諏の委員のみ不参せり。所得調査委員とは民意を斟酌する名目の為に人民中より選ばれたる委員を諮問機関として設けたるのみなり。此辺の消息を知りたるを以て一言を發せず。問題は各地方別に大体の状況を打合せたるに殆んど同一に出でたるものにて、只原案を如何に修正するかは充分考究する余地あるべしとなす。浅間小柳に投して宿とる。鉄石なる篆刻陶器家を訪問す。辰野辺未だ桜散らず満開の処あるもあり。社会の今日 国歩愈々艱難支那に於ては排日、露に於ては漁業抑制をうく。

【語句の説明】①所得税調査委員会：所得税の算出基準である各個人の所得額（年収）を確定する過程に参与する役職。税務署管内の所

得税納税者同士の互選で選出される。納税者の不満を緩和するためとして所得税成立時（一八八七年）から設けられている。市町村ごとに人口に応じた選挙人を選び、続いて税務署管内で選挙人が調査委員を選挙するという複選制だが、それぞれの段階で地域有力者による事前調整がしばしば見られ、無競争選挙となることも多い。

②篆刻：木・石などの材料に、印として文字をほりつけること。印刻。多く、篆書体の文字が用いられたところからいう。

五月二日 土曜

晴。久し振りにて悠々温泉宿に自適す。朝八時出発して沢柳と共に松本司令部を訪問し、野間少佐に会いて話し、予は独り小穴弁護士を訪問して来意を告げ、銀行よりの枚田村治事件につき〔後欠〕。

五月三日 日曜

〔記事なし〕

五月四日 月曜

晴。多忙な日であつた。午前中銀行へ出勤して金田より行務の報告をうけ、松本行の報告をした。曰く区才「裁」判所判事は予の仮還付申請に対し「目下執達吏の手中に仮処分なし居れば、其の仮処分が片付かされは如何とも致し難し」又示談成立の申請も、手続出来居らざれば之を如何ともし難し」との事なりし由を頭取にも報告せり。

次に税務署よりの通知により所得調査会に出席して吾調査区を定め、猶開会して野原は「松本其他各南信地方の調査の結果原案より二割三分を引ききたる事実あり。果して然らば始めより原案に対して二割位を

引ききたる上調査すべし。其事実如何を問合せられたし」と論し、予は養蚕所得と田畑所得の間に杆槓を失するものありとし、生糸の価は半減し米価は四割減なり、然るに養蚕所得を零とし米穀所得を何の斟酌も加へざるは杆槓を失せる事甚し」と論したるに、署長は養蚕所得は数字少なるを以て之を省略したりと答へ其不合理を論し、結局予は明年度原案作製にあたりては充分考慮する事、及各個の所得計算に当りては斟酌する事の二条件を付して置けり。

銀行にて福沢、片桐石太郎兩人に会い*の荒町家屋を売却の談をなす。四百円にて十一日迄待つ。組合に來りて役員会に望む。重要な会議にて一、三千円手金問題―保留。二、統一問題―打切、―但し調査のこと。三、機械繰糸取付場所―本所と仮定すること。四、惣代会を十日に開きて決すること。

【語句の説明】①杆槓：槓杆。挺子（てこ）と同じ。比喩的に物事を変えたり、動かしたりする力となるものをいう。

②荒町：現・飯田市中央通。堀端の西、縦通りの町の最北に位置する。江戸時代、町は武家屋敷と荒町陣屋が中心であつた。

五月五日 火曜

晴。所得調査会あり、銀行より税務所に行く。午前十一時頃迄は銀行に居りて、それより税務所に行く。片桐石太郎、福沢の兩人銀行來訪して、*****居宅を買ひ度き旨申込ありたれば、現金四〇〇円ならば売りに申渡す。午後六時帰りて仕度をなして上京、山口氏招宴に行く。飯田より松下氏と同行す。

五月六日 水曜

晴。朝六時二等車は新宿に着、松下氏と分れて白梅園に向ふ。同車せるものに河野、飯沢の兩人あり、別れたり。白梅園に入りて入浴し、午前中床に入りて汽車中の労を医す。

午後より市中見物に出す。三越に農民美術、松屋に俳句展覧会を見る。沢山の史料にて一一見る事を得ず。日本新聞に綾川氏を訪問したるも、僅に二三分間にして話す事を得ず。今村氏著青年訓練所の状況に関する著書、利益分配すべき様頼みたり。中谷不在、直に宿に帰り衣を更めて羽織袴を着して、龍明館支店に松下を訪問す。林雅治も席にあり、共に相携へて午後六時帝国ホテルの山口氏祝儀宴会場に到る。始めて東京にて帝国ホテルへ行きたるなり。穴の如き内部、穴居生活を連想せらる。待合室にて白鶴の相撲の講談あり。終つて宴会西洋料理にて開かれ、テザートコースに入りて媒灼人丹羽氏立ちて両家の系図を述へ新郎新婦の経歴を話し賀詞を述べたるに對し、田中宗平氏來賓を代表して賀詞と礼を述べ、万才を三唱して徹宴す。伊原氏の招待にて銀座裡歌舞〔伎〕座前の兎玉亭に至り、更に舞妓を見て二時間計り話して、神田駅より分散せり。

【語句の説明】①日本新聞：藤森勇主宰の日刊紙。一九二五年五月創刊。綾川武治、小川平吉などが関係し、政友会に近い論評であった。②青年訓練所：男子勤労青年に主として軍事訓練を実施するための教育施設。一九二六年に公布・施行された青年訓練所令により設置された。一九三五年に同年齢の青年を対象とする実業補習学校と併合し、青年学校へ改められた。

五月七日 木曜

晴。白梅園の一室静寂にして遠くに電車のきしる音を枕に聞くのみ。

朝七時信也來訪して次の話をなす。「此頃学生監督より招かれて行きしに、曰く或る富豪より其の宅より通学せざるやと勧められたり。若し要すれば多少の学資も見てやるとの事なり。其富豪とは三井物産の安川勇之助氏の事なり。其の息同しく農大に來り居るを以て其の友人として招かれたるものならんと」安川氏より有望なる青年を其の学友として招かれたるは結構な事なるか、安川氏方に行く事は賛成なり。併し学資及金銭物質の援助を乞ふべからず。又贅沢生活を感染すべからず。此二条件に注意すればよし。併し学生監への返事は国元へ問合中なればそれ迄待つべしと告げたり。直に其の話を聞きて三井物産に下田文一を訪問し、安川氏の家庭の状況を問合せたるに秘書を呼びて其状況を問ひ合せられたり。

尚下田と三越にて昼食して分れたり。小松氏を久し振りにて訪問し一時間計り話して帰る。松阪屋にて土産物若干買入れ帰宿す。午後五時中込弁護士來訪し供託公債一万四千元、片紡株五口持参しくれ名川事務所に対する謝金等につき話したり。中込氏へは三百円の礼をなせり。名川事務所へは後日の事とせり。

予記 中込氏歸りて後信也再來し、安川氏方に招せられし事に付再三話し共に宿を午後十時出立して新宿にて分れて帰る。松下氏も同車にて帰る。

【語句の説明】①安川勇之助氏：安川雄之助（一八七〇—一九四四年）。昭和時代前期の三井物産会社で筆頭常務取締役を務めた実業家。京都生まれ。一八八九年三井物産大阪支店入社、一九一八年常務取締役へ昇進、以後三井物産の重役として三井財閥の基軸事業になった総合商社の経営にあたった。のちに東洋拓殖会社総裁。

五月八日 金曜

曇晴。午前七時に伊那町へつき支店を訪問す。支店長菅沼に会いて左の質問をなす。増田と米山との事務引継は何の支障なく終了せるか「支障なく終了せり」、「増田の負担となるべき不明のものはなかりしか」、曰く不明のもの及増田の責に帰すべきものはなし。其他伊那委託等の話をして一時間にして辞し去る。午前九時半銀行に帰り、小使をして荷物を宅に持参せしめ、其代りに折カバンを持参せしむ。

所得税調査員会は税務署を離れて仙寿楼に於て開く事に決し、委員仙寿楼に会せしが、大体一割をテン引する事（原案に対し）議論の末税務署に到りて会議を開き、原案一割引にあらざれば審査出来すと主張す。予は土地所得の他の所得に比して何の斟酌もなく、之に課税せらるゝは悪法なり、農村の現状は総ての課税皆土地を標準として課税せらるゝ事、配当所得は四割、労働所得は二割を減せらるゝに比し、土地所得に限り何の斟酌もなし、故に農村は益々衰頹するのであり土地は無価値になるのである。法は悪法なるを以て其法を活用すべく、斟酌を加へられん事を望むと述へしに、署長は法の通に吾々は適用し居るを以て之を枉げる事は出来んと答へたり。

仙寿楼に帰りて市瀬、沢柳、田口と夕食を共にして帰る。信也の安川氏より頼まれたる事を話し家族皆て喜ぶ。

五月九日 土曜

雨。組合支所へ行つた。青山専務に面会して明日の対策を講し、所定の目的即ち惣代会の決議をして統一問題と共に機械繰糸設置問題を解決する事とし、暫く機械装置は中止する事との決議に誘導せしめんとするなり。依て待ちつゝ、ありしか来らず。塩沢新九郎、江塚佐三郎

の両氏来りて水城道路（水城より組合支所迄の分五米に打帳）完成に付之れか決算をしたる処、八百七十円の不足を生じたるに付、前の言の通り（前に兎角やつて見よ後の勘定はしてやる）不足額は寄附してやるとの事なりし故寄附を願ひ度しとの申出ありたれば、其の前言は保証の限りならざるも寄附する事は必ず寄附すべし。其額は私より明言出来されは追て役員会に諮りて決定すべし。それ迄待たれよと言ひて上飯。

所得税調査会百十七B二階に開かれ市瀬、島岡の二人と予の三人にて割引の原案に修正を施す。銀行放課後明日松本裁判所より実地検証に來行するに付打合せけり。調査終了後川路三穂修正案を作る。尚中原宅に勤労党役員会あり、政策大綱に付論せしが決せず。勤労党のものを採用し大体に止め、細目は下伊那に的中するものを選定する事とし、印刷所を設くる事に付資金に困れり。

予記 信也へ左ノ通申送る。安川氏に世話になることは諾。但し金銭的品質的援助はうけざること、贅沢を覚へざること。発信 森本信也。下田文一、安川氏宅へ信也世話になることに決す。

五月十日 日曜

晴。午後一時から組合本所て惣代会を開いて器械繰糸機問題を決定す。〔結〕末を付ける事とした。原案は「多条繰糸機を第一工場へ設置せんとす」との事であった。此原案か惣代会に提案せらるべく通知あるや、新井、上溝、久井、寺所等の惣代は耳目を尖らして一蹴せんと計画したらしかった。元より多条繰糸機購入と設置場所に付帯して工場統一問題が伏在して居たので、此ウルサイ問題の解決をなさんとワザト此様に提案した。午前中銀行へ行つて午後会議に望んだ。毛賀清水に属

するものは賛成論を唱へ、他のものは反対論を唱へ、遂に別室に役員会を開いて原案撤回をなした。此の捨身の戦術には元より考へさせられた。或るものは責任を問ふか如き口吻を洩らした。併し予定の行動であるので其他二問題と共に解決して其儘終了して再び上飯した。

組合事業の経営もいやになつた。元より事業の如きは相談をして居れば到底出来ないものである。専断的にやらなければならぬ。マア併し長ひ間の問題多糸繰糸機も暫らく見合せる事に落着いたので安心した。予の一人身上に関する批難は勿論甘んじて受ける所である。

五月十一日 月曜

晴。銀行へ出勤した。所得税調査があるので、百十七楼上で調査員の原稿を作つて、之を呈出すべく書き上げた。勤労所得、配当、貸金等の所得を除く外は、皆一割位を所得を減額修正の意味を以て修正案を作る事とした。大体の成案は出来た。殊に予は川路三穂龍岡等をやつた。半分は銀行の仕事も出来、且又調査会の仕事も出来て好都合であつた。咳も咳も出るので、肺に多少の故障があるかと心配した。併し何もなかつた。所得調査員の仕事も夢の様過ぎた。林虎造等の老人相手の事であるから、殆んど仕事としては能率は上らなかつた。併して会期終らんとする時、原案修正案を呈出して、当局の承諾を経るより外致方はなかつた。

発信 信也。下田文一。

五月十二日 火曜

雨風。風雨激しく、併も寒冷なり。

調査会を銀行楼上に開き、各査定案を作りて持ち寄り、之を税務署

につぎつけ査定案として交渉する事とし、予は松尾以南をうけ持ちたり。提案出来て之を野原会長に提供し、上郷以北の林の受持の分を除くの外全部をまとめて、夕刻午後四時頃税務署に到りて之を署長に呈出し、調査員の調査案として呈出せり。併して直に散会し、児島に引上げて夕食をとりて散す。

予は午後一時百十七B、大平、組合及予の四香奠を持ちて、市田組合へ光沢の組合葬に参列す。時に松沢茂雄、松下修一郎と共に会葬して午後四時帰飯して後、調査委員と共に調査に着手す。頭取と増田仁解雇問題につき打合せたり。咳痰出ず。春蚕掃立を了す。寒くして60度を超へず。手足冷ゆ。

受信 山口英九郎祝儀の礼。

【語句の説明】春蚕掃立：春蚕とは、春に飼育する蚕のこと。掃立とは、蚕卵から孵化した蟻蚕を拵げ、桑葉を与える作業のこと。

五月十三日 水曜

晴。所得税調査の最後の決勝をなすべく税務署と交渉すべく、七時半出て百十七Bに於て沢柳と打合せつ、ありしに、野原来行し、予が最も強硬なる意見を有するを見て説破すべく来りたるを以て、予は會長として、却て吾々をして強はらしめ其の仲裁をとりて適當の処に決裁をつけるが會長としての職務なる事を告げたり。午前九時委員全部揃ひて昨日呈出したる調査書の補をなし、又原案として重要なもの未発表なりし故、其記入をなして、午休中に上郷以北の調査書を林老人よりあづかりて査定し、之を呈出せり。併して午後再会せしに提出の修正案は多くは認められずに終りたれば、正面衝突を来し遂に決裂〔裂〕して、午後五時委員は仙寿楼に引上げたり。併して最後の肚を

決して、若し委員の修正案を認められざれば再調止むを得ずとして、岡島に電話にて其の状況を問合せ、又上伊那の状況を問合せ等して、午後十一時迄今後の対策を講じて研究せり。署長は、吾々の提出案に對し原案に準拠して修正せられたるも、従来の飯田の例を破らざらんことを要望せり。

予記 予は最も硬派と見られたり。宿三原屋来訪す。〔中略〕電話にて片桐より家買方断り来る。

五月十四日 木曜

晴。所得税調査会あり出席す。百十七銀行重役室にて沢柳、島岡来りて相談せしに、前日よりの提案不応に付到底調査員の修正案は是認せらるゝ処とならず、再審議も原案執行も敢て辞する所にあらずと決心して、本日を如何にすべきかに付話し居れば、野原氏より課長を招きて交渉中なりとの事に最大限度の削減を希望し置く。野原氏は吾等の意のある所を体して、課長と午前中折衝したる結果話まとまりたりとの事て、田口、島岡と沢柳と三人にて三宜亭のツ、ジ、藤を見物に行き、花の下にて麦酒を飲みて昼寝せり。税務所へ午後五時税務署に集合して妥協案を野原氏より示して同意を得、収益所得にて総額の七分、田畑所得にて六分、其他にて七千円を減額する事となり、殆んど裂決〔決裂〕せんとせる所得調査出来上りて散会せり。各地共調査会は六ヶ敷かりし由。終つて三宜亭に於て夕食を喫して後、市瀬、沢柳と予と課長を伴ひてみくにに行きて二次会をなし、午前二時帰宅せり。

五月十五日 金曜

晴。朝七時迄眠つた。午前二時帰宅して伏したので、未だ睡氣醒め

ざるに、阪井来訪して、供繭担保として借入金申込あり。青山を訪いたるに不在なれば来訪せりと云ふ。組合へ行くべしと告ぐ〔後略〕。組合支所へ午前十時頃出頭し、市瀬より提出せる惣代会決議録を見る。其記載予の意の如くならず。市瀬に其の原稿を見せたる上に於て署名者の印をうくべしと告ぐ。

銀行へ行く。吉川をして思想史決算書を作らしむ。聯合事務所へ行く。原より話あり。平野、北原両氏と予と大平農会長留任運動に付、予に其運動方を頼まる。蕉梧堂に木下中央金庫主事を訪ねて話す。

【語句の説明】思想史：一九二四年一〇月二六日に創設された下伊那国民精神作興会が頒布に努めた、市村威人著の『伊那尊王思想史』（下伊那国民精神作興会、一九二九年）を指す。

五月十六日 土曜

晴。銀行へ出勤す。大平頭取病氣なりとて欠勤す。彼は財界不況の結果自個の経済界に於ける不安より心配し、神経衰弱となり意気消沈せり。依て予は出勤して増田仁を召致して彼に解雇する旨を宣言せり。彼に對して辞表を呈出せん事を求めしも、一考したる後にてせんと引下れり。臆首はよき事にあらず。彼が来りて予が解雇の旨を告げたるに、「何か私が悪い事かあつたか」と訊ねたが、別に長い間働いてくれたが悪ひ事はない、銀行の都合で止むを得ないと告げた。放課後漁業組合の惣代会に出席して虎史郎に会い、彼と共に山本へ庭を造つたのを見旁々遊びに行つた。午後七時半に着して夕食をとりつ、父、兄等と飲談を交へた。悠々自適の仙境である。

予記 役場から来てくれと云ふので行つた。農山漁村の低利資金か来て居るので受取つてもらい度いとこの事であつた。乃て仮領収書を渡

して九万五千三百円の金を勸銀から請取つた。直に信聯へ当座で預入れて、それを百十七Bへ入れた。

【語句の説明】①馘首：首を切ること。免職または解雇すること。

②漁業組合：下伊那漁業組合のこと。一九二四年に下伊那二十六町村を区域として設立。当時は一九二九年に発足した長野県漁業組合連合会に属していた。

五月十七日 日曜

晴。養蚕一眠せり。氣候暖気加る。

山本にて朝五時起きて静坐す。昨夜飲酒せしに下痢を催す。石間招にては庭を改造し石を沢山入れて滝を作り等して狭き庭園石多く容れたり。其風致ナカ／＼上手なれば、誰が造りしやと問へは、父が設計にて庭鎌を主任として造らしめたりと云ふ。風致あり面白し。午前中虎史郎と父と予と三人茶をくみて俗事を話し合ひ悠々自適す。来客もなくノンキなる生活なり。村の公職をなすにあらず。父も兄も悠々自適。何の屈托もなし。野心もなく只平常時を平凡に過すのみ。午後虎史郎と帰る。

組合本所に出頭す。低利資金を借入其れを各組合員に分配する事とし、毛賀耕地委員平沢為次郎を召致して農山漁村低利資金一三〇〇円を毛賀耕地に貸付の話をなし、其他の低利資金申込者へは代表者の召致をなしたり。猶惣代会の決議録記才〔載〕方に付、市瀬に小言を云へり。其要点は南北二派に分れ論戦したるか如き事。多条線糸機設置を研究の上迄延期する意味にて原案撤〔撤〕回をなす事等の点につき議事録不備なり。

五月十八日 月曜

晴。朝銀行へ行く。午前十一時半組合本所に引返す。正午組合員の低利資金借入に関して協議すべく参集を求め、予は主要の振替事情に付て説明し、払込期日は六月三十日、九月三十日とし、納税貯金の如く其納期前は利子を付する事、各自明細表を作りて其金額だけ個人の組合よりの貸付を振替整理する事、利率は四歩一厘とする事等全部注意事項を話し帰途、役場にて助役に会い、組合より役場に提出すべき証書に個人判をする事は組合理事は出来ないから予証書を担保としてとられん事を望みたるに、村長と話しして回答すべしとの事て、明日を約して去る。

再び飯田に引返して放課後井村成治の送別会姫城館に開かれ出席して帰宅。此日組合の会合は思ふ通り話進みたり。此低利資金の借入は大成功にて、且又将来果して返却を要すべきものか、或は永久に低利にて貸下けくれるものか、或は後者ならんと観測す。蘇峰先生の「居静観動」の書仁藤氏より送付しくれたり。

五月十九日 火曜

晴霜。底冷のする日なり。霜来りたるも桑に害なし。

組合に行く。青山専務に不在中の話をなし、低利資金の借入と其の振替につき話したり。猶青山より横浜の状況及松本に於ける多条線糸機研究の結果に付て其状況を聴取せり（而も研究委員に付託する事）。尚事務員移動の件につきて研究し、青山の案は製糸部主任書記をして検査課を兼摂せしむる案をき、たり。猶江塚佐三郎が農会長の倚子に就くや否やに付て塩沢来組して話ありたるも、予は此の話をさげたり。猶午前十一時上飯。

放課後百十七銀行に關して橋爪和一より批判し忠告したき事あれば、松下修一郎氏と共に一夕会見したしとの希望を利用せんと仙寿樓に午後五時より參集して話す。橋爪は金田支配人の醜遇と、其の補助又は指導役として予か店頭に表示はる、事に付話あり。猶行員陶汰と減俸等につき話ありたれば之を聴取し、尚大平頭取の異議問題に付ては松下氏は出よと云ひ、橋爪は不可と論し、尚財界の不況より之が対策及下伊那に於ける財界等につき、最後に国策、政事を論して散す〔後略〕。

五月二十日 水曜

晴。組合に立寄つて青山と話した。青山は自己の意見を他に転化して人事問題を予に諮つた。木下房吉を支所主任に転せしむる件は、吉川順次郎氏の意見としては製糸部主任とし、其後任は木下六郎と市村との兩人を当てると云ふて居た。それで此意見に同するか否かと云ふ様な態度であつた。予は暫く預りて承り置くと云ふに過なかつた。又山本清次郎に依願退職を勧めた。彼は予の勧告に対して始めは反抗的言句を弄した。併し予の条理ある話にも諾した。それから上飯した。

銀行では放課後金田、原田両支配人と店頭の人員配置に付て相談した。又昨日橋爪、松下と会見の結果、両氏は金田を酷使する事、冗員多き事、頭取の問題等（異議の出否）に付て意見あり。余は最高政治に就て話し合ふて別れた、と話した。夜中原宅に勤労党支部役員会あり、座光寺、古川、田中と予が出席して、邦文堂印刷所売却せるを買入の話あり。二〇〇〇円位なれば買取り得る由聞及ぶ。此後の拡大運動等につきても話し十一時散。

社会の今日 共産党事件発表あり。天人共に怒る。

五月二十一日 木曜

曇晴。銀行出勤す。午前中福沢順一來訪して、**所有荒町の住宅売却に付て話あり。三百円ならば小林喜七に現在居住すれば売却すべしと相談して、交渉方をたのみたり。午後銀行へ来りたるも小林来行せざる為め午後六時帰宅せしに、夜に入りて再び福沢来り、交渉し売買契約三百円にて成立せる旨話あり、之に一任せり。直に銀行に出勤せり。

組合の人事問題は常に念頭にありて、再考すれども六ヶ敷問題にて決しかねたり。小林岩重精神に異状を呈したるの報及其他の問題にて、銀行もいやになり、組合もいやになる。財界の此の革命的變動、如何に推移すべきや見当付かず。大勢に引づられて進むのみ、前途暗澹として目安付かず。午後になりて頭痛し気分悪ければ静養す。共産党売国的兇暴事件発表せられる。兇悪共に天を戴くべからず。併し近來の同胞皆国事に鈍感となり、国を憂ふるも自ら起つて牛耳を執るものなく、徒に喧噪をなすのみ。あゝ。

五月二十二日 金曜

雨〔後略〕。

午前中銀行に出勤して、午後一時頭痛と歯頭〔痛〕とすれば退勤して帰宅し静養す。マツを召きて按摩せしむ。村長、助役、村土木委員揃いて組合支所前より里道改修すべしと勧告に来り、伊沢収入役、猪佐雄、今村与一郎等来りて道路を如何にすべきかに就て議したるに、惣代二人共しりぞきて出でず。

予記 病氣にて午後静養す。南の道路拡張問題起る。

五月二十三日 土曜

晴。組合支所へ行つた。青山に面会して、毛賀を中心として専務及組合長不信任の聲が挙つて居ると云ふ事を聞いた。併してそれに対しては、組合の仕事をかきやつて居ても甚だ面白くないから、其んな不信任の聲が呈出せられない先に先手を打つて、中央へ組合を統一せんとの案を提出し、若しきかれずんは総辞任せんかとの事を専務より話あり。不信任の聲は組合員の不良分子より起りたる事は想像に堅からざるも、兎に角予の独自の立場を以て其内容を担査する事とし、正午上飯、銀行出勤す。

橋爪和一来訪し、自行株の売却減資に付て話あり。組合の以上の話によりて松田政一を電話にて呼び出し、組合長及専務の不信任案の如何に成行居るかを調査を依頼す。仙安にて召致して其内容等を確むべく松田に依頼せり。午後六時聯合事務所に開かれたる漁業組合対電委員会に出席す。午前中より追手町久保田旅館に開かれる筈なりしも、予は出席せず。併し対電委員としての顔ふれを見たる時、予の名も省かれしは幹部の予に対する気配も察知せられ不満なりしを以て、信三鉄道とサブリ場問題との経過を桑山、熊谷に話して分れたり。

予記 道路問題にて有志会あり、父集会所へ行く。三原屋問題にて父上飯せり。
受信 信也。安川招聘未解決。

【語句の説明】①対電委員会：三信鉄道の開発によつて漁業権が被害を受けたことに対し、漁業組合員数十名が交渉にあつたことを指す。

②信三鉄道：三信鉄道のことか。

③サブリ場：サブリ網（生糸で作られた網を二本の竿に張り、竿本を

束ねて水中に投出して使用）を使う漁場を指すと考えられる。天竜川でも「岸岩突出して水勢稍洩回なる場所」でサブリ網が使用された。

五月二十四日 日曜

晴。午前中自宅に悠々自適した。多忙に生活して二六時中に使役せられる生活、二六時を使役する生活に復帰せねはならぬと常に考へさせられた。信也へ手紙を書いた。安川次郎氏の学友として招聘せられた事に付ては、信也が心配して居た。果して次郎氏の様な神経質の贅沢な青年と調和して行けるかどうか、予は将来立身出世の為に是非行けと勧めた。併し果してそれが彼の為によいでしょうか、之は一つの疑問ではあつた。が、招聘に応ずる様に申送つた。父母は同意しなかつた。

午後から神稲組合に生糸聯合会問題に付て組合製糸の研究会があつて出席した。虎史郎の処へ立寄て其空気をきいた。併して午後三時半頃出席して見た。付近の組合が十ヶ計り寄りて各役員と話して居た。要は神稲組合が伊那社及聯合会を無用の長物として之より脱退せん、其模様を他の組合に承り度いと云ふのであつた。岡村、原が説明した。予は何とも云はなかつた。両者共育成論者であつた。酒宴が始まつて、予は伊那社には余り望は囁せないと云ふた。

予記 不得要領に終つて帰つた。午後七時から本所で役員会を開いて、水城の道路補助問題を六五〇と決し、第一工場タンク修繕を最小限度の小修繕とする事に決した。

発信 信也。大久保政夫。代田市郎。

【語句の説明】①神稲組合：神稲（くましろ）は、現長野県下伊那郡

豊丘村神稲のこと。

②生糸聯合会：長野県生糸同業組合聯合会。一九一四年三月十三日成立。製糸業に関する諸請願、講習及び講和会、内外蚕糸業に関する調査、外国機業及生糸貿易に関する視察調査、職工取締、模範工女の養成、勤続模範工男女の表彰、糸価維持に対する対策、会報発刊などを事業とした。

五月二十五日 月曜

晴。銀行に出勤した。岡部高遠支店長が来訪して銀行業の前途を論じ、行員に不安なからしむる事及び人件費節約は如何と切り出した。行員のみならず社会不安は一般の世相である、人件費は今の処節約はするが各自の給料の引下を行ふ程窮迫せずと答へしに、銀行は将来如何にしてやつて行くかと切り込む。成るより成らされは成行のまゝに任せるより外なし、そんな重役では信頼して行と生死を伴にする事は出来ないと云ふ。然らば如何にせはよきや、名案あるかと云へは、合同とか株式交換の法によるより外なし、そんな事は既に手を尽して居る、どんな内容を有するか、そんな事は言へない、機熟して後始めて実現するなり、山口、伊原両氏の如きは合同談をすゝめるにはよき人物ならずや、自ら陣頭に立つ事は出来ないから止むを得ない、十九、六三の合同を促進しては如何、それはよい事なり、等話す。真面目なる彼の愛行の態度に付、予は話す。金田より、橋爪に話した予の一県一行主義と合同談は却つて彼に不安をいだかしめ失敗なりし由を聞く。原貞次郎来行し、大平に話したる結果を問はる。予は、話しては置いたが黙して彼は去つた、何とも返事はなかつたと話した。

予記 川部骨董屋が来訪して道具、書画を見て行つた。夜、橋本屋に

道路の話があつて、中島、マセ口、泰治、順太郎等が集まつて、役場より助役竹村が来て、耕地惣代両者から承諾の印をとつて行つた。予も父の代理として出席した。

【語句の説明】①十九、六三の合同：一九三一年六月、営業不振の第十九銀行と六十三銀行は、三菱および日本勧業銀行の斡旋を受け合併し、八十二銀行となる。

五月二十六日 火曜

晴。朝夕冷気にて火氣に近つきたくなる程なり。毎日朝夕冷気なれば年の豊凶を憂ふ。

減俸問題起るや司法官及鉄道官吏一切に之に反対し、鉄道省の如きは運転を止むも辞する処にあらずと、官吏としてあるまじき態度に出て官吏の態面を汚す事甚し。国歩愈々艱難に陥る。

組合に行き専務と諸事打合をなす。青山専務も一生懸命仕事をしても組合員からよく言はれんのでイヤ気がさして居る。松田の調査の結果（毛賀清水に於ける不信任問題）に見るも霧消するらし。正午少し前銀行に出勤す。大平頭取と銀行の将来につきて策す。岡部氏の来行の意志も語り合ふ。

午後一時より二階に於て所得調査委員会あり、曾て訂正方依頼し置きたる調査書出来たるを以て之を記入すべく決定し、記入終りて後、仙安に於て勘定をなし、土地所得に於て減額の見るべきものなきを以て署員の不誠意を難し、各村別の割宛表を作らしめて其を見て抗議を申込む事とし散す。

役場下より県道の開通式あり、召待をうけたるも欠す。役場で八幡駅・喬木駅出願あり。村協議会ありたるも欠席す。

受信 和田衆治。

社会の今日 鉄道吏員の減俸反対熱上る。通信省等へも飛火す。

【語句の説明】①減俸問題：浜口雄幸以降の民政党内閣の官吏減俸案

に対して、官吏側が反対運動を展開した問題（一九二九～三二年）。

第二次若槻礼次郎内閣は、実行予算を編成する際に一割以内の官吏減俸を行う案を作成しており、それを知った鉄道省官吏や司法官をはじめとする各官庁の反対運動が拡がった。しかし、この日、俸給令改正（減俸）の閣議決定が行われた。

五月二十七日 水曜

晴。銀行へ出勤した。銀行業が至難な事業の一つとなつたに付ては逃げ出すわけにも行かないので止むを得ず止まつた。出勤して見るも自分の性格には会はない事は明である。客に接して、客をして呑み込んで仕事をする程の金田の様な手腕はないし、去りとして頭を下けて金を儲けたいと云ふ事も考へない。出来たけの仕事をして居た〔中略〕。三十分計りにて松本に向ふた。

北原源三郎・倉田又一等が電車内にあつた。聯合事務所を訪問して思想史の決算に付て下田に話し、決算書を作り来月早々幹部会を開いて承認を経る段取とした。中谷より電報にて誰か上京する様申送つて来たと中原留守宅より聞き、幸中原上京中に付出向する様に申送らした。

五月二十八日 木曜

晴曇小雨。浅間の宿小柳に朝七時迄床にあつた。温泉場の朝寝の享楽を恣にせんとも考へたが、午前八時から才〔裁〕判所の方へ用件を

果すべく出向せなければならぬので、朝湯につかる暇も少く宿を出た。不景気の結果で浅間の温泉場も至極閑散の様に見うける。

裁判所では監督判事に面会して仮還付してもらい度と申込んだ。書類を調べて提出せられて居る事や、付帯私訴の未提出な事を聴いて、目録を添付して請求書を出す事にした。法廷は一号法廷に開かれ片桐一美と亨次郎が出た。弁護士は萩元と有阪が弁護した。検事は事理明白であると云ふので、論告は簡単であつた。萩元の弁護は人情論と一つは誘因として銀行の監督の不行届を論じた。有阪は法律論と減刑論であつた。要は執行猶予を乞ふた。検事は一年六ヶ月の求刑をした。判決は六月四日午前九時と決した。

退廷して日本銀行松本支店に中山支店長を訪問して県下金融界の話をした。猶産業組合の状況等につき種々の話をして三十分計りの後退去した。汽車中に神戸共栄社長に会ふて、小野へ下車して共栄社のS O式多糸繰糸機を見た。其の感しは機械繰糸によるより外なしと決した。銀行の奉公より産組に去る考をした。大平の下で働く事が考へさせられざるを得なかつた。

【語句の説明】①付帯私訴：旧制の刑事訴訟で、犯罪により被害を受けた者が、被告人に対し損害賠償を求めため、公訴に付帯して行なつた民事上の請求。

②中山支店長：中山豊。日銀の松本支店長（一九三〇年一月～三二年八月）。日銀の松本支店は、一九二五年に製糸業・養蚕業への積極的援助の為に設置され、製糸金融の中枢に日銀が関与することになった。

③神戸共栄社：松本地方の組合製糸共栄社の社長神戸八郎。大日本生糸販売組合連合会監事を務めた。

④ S O 式多条線糸機：大久保商店製糸機械部が発売した多条線糸機。

金属製で、緒数は二十緒。一九三一年一月まで二千五百二十三台が販売された。

五月二十九日 金曜

晴。夜来の雷雨晴れ清々し。

組合支所に行く。井深より出張機械線糸機に付ての状況の報告を聞く。市村に会計の事務を命じたる時引受くべき旨を申渡す。龍門寺に和尚を訪問して新緑を前にして雑談を三十分計りなしたり。

後銀行に上飯出勤す〔中略〕。福住洋服店を招致して夏服一着を作らしむ。指定値段三十円也。中原が愛国勤労党（反動党）として、盟主として立ちたる記事南信新聞に出づ。帰宅の途次組合に立寄り、タック修繕の状況及煙突継替の工事等を見て帰る。青山に邂逅し、明日の役員会の件其他に付彼より話を聞く。宏風邪の気味にて咳出て寝汗出づとて心配せり。山本兄より手紙にて、久男に小作地あり、小作するや否やに付問合ありたり。

発信 中原謹司（上京のようを問ふ）〔後略〕。

【語句の説明】南信新聞：一九〇二年一月発刊の政友会系新聞。民政党系の「信濃時事」に対抗した。

五月三十日 土曜

晴。忙はしい日であつた。銀行へ出勤して〔中略〕、市瀬明の母の葬式があつた。香奠壹円を贈つた。

午前中に銀行を退いて組合の役員会に出席した。製糸部決算に付役員報酬及慰勞備金積立金の決定其他決算の承認及總會召集期日等であ

つた。補償生糸にかけた事に付ては其決算が如何になつて居るか、昨年の決算はどうなつて居るか、本年の状況はどうなつて居るか等に就ては種々の議論があつたが、結局未だ確定的のものでないから何時支払はなくてはならないか不明である故に其俣とつてある由も総代会に於ても報告する事として後、田中理事より提案の蚕種家指定の件は、組合員の昨年及本年の指定蚕種家を調査して後とする事としたり。

伊那社役員会に出席す。出荷組合代表者会と同時に行はれたり。後、姫城館に於て羽生、木下昭一、足利、大平に予が会同し、伊那社及聯合会の件につき役員が更迭する事に話まとまり原幹事長と打合せたり〔後略〕。

【語句の説明】①補償生糸：一九三〇年三月、政府は糸価の暴落阻止および安定のため、製糸業者への融資により銀行が損失を受けた場合には政府がその損失を補償する「糸価安定融資補償法」を發動させた。同制度では、問屋が製糸家の代理人として生糸を担保に銀行と借入契約を結び、その担保生糸が「補償生糸」、「補償貸付生糸」などと呼ばれた。この糸価安定策は失敗に終わり、補償生糸は膨大な滞貨となつた。

②出荷組合：伊那社に加盟する組合のうち、各組合工場で生産した生糸を長糸のまま伊那社に出荷、束装・荷造りして伊那社の商標で販売していた組合。当時は、各自の工場で束装・荷造りした上、単独で直接商社に出荷していた組合もあつたが、一九三二年から全組合が伊那社に全額出荷することになった。

五月三十一日 日曜

晴。組合本所に行く。石原監事来組し製糸部決算を見る。予は之れ

か接待をなし、木下房吉説明役となる。二三計数上の誤りあり、之を是正せり。午前中にて終了す。午後銀行に上飯して小林喜七及其甥とに面会し〔中略〕、終つて伊那社総会に出席せしに、午前九時より始まりたるものが午後一時よりなりと誤りて出席したれば丁度終了する時にて、昨日の計画瓦解し責任上大に困却の立場にありしが原唯一及原森穂等より其内容を聴くに及んで、足利が役員数減する旨を説明して臨時総会に於てする事に決し、予定の計画成立せず、不日役員会を開きて決する事として無事終りたるも、一般の空気は清水に不利にして、聯合会役員は辞して再び新しき役員とする事を松沢・原と打合せたり（姫城館にて）。

予記 伊那社及聯合会の不断の悠長なるもの不満に堪へず。

六月一日 月曜

曇小雨。組合支所に行きて青山、江塚両氏に会い、種々打合して上飯す。宮沢彌の貸屋を売却し小林喜七なる人買ひ、其の屋賃四、五兩月分の金十四円を持参したるに付、之を受取り預り証を返す。宮沢を呼びよせて、家屋登記抹消の手續をなすべく委任状を書かしむ。

銀行にては岡部氏より金融問題に付て意見を申送り来り。金田宛の文、よく読めは彼か経済的研究立派なるものなり。一一首肯せらるべき文字なり。当今金融状況の行つたり、地方銀行の立場として合同するより外策なき事を語る。併も頭取に何等経倫すべき意見なく、徒に月給をむさぼるの徒のみ。大平氏にして如此し、事艱初現丈夫心とは蓋し千古の名言なり。大平氏は郡農会長、軍人分会長等つとめしが、事を伴にする男にあらず、只自己の計算上より地位をむさぼりたるのみ。此の銀行の難局に当面して何の策も計画もなし。

種々業務に掌輒して帰宅すれば、父不在にて〔中略〕。伊那社清水排斥運動として表れるが、昨日の総会に於て事成就せず、二の矢を考へ中。

予記 組合支所にて江塚、青山と話中、養蚕家視察は組合員の予に対する排斥の緩和策なりとせば、予はあへて之をなすべからずとも考へたり。信也の問題を金田、原田等にも話す。

発信 下田文一。信也の件、一応詰問させるから頼む。

【語句の説明】事艱初現丈夫心：禪語「雪後始知松柏操、事難方見丈夫心」（雪後始めて知る松柏の操、事難うして方に見る丈夫の心）の「事難方見丈夫心」のことか。

六月二日 火曜

晴。冷気勝にて植物の繁茂少く、茶は葉量昨年の半量なり。桑も亦同様の如し。去年肥料を施さざりしと、繭安の結果養蚕の気込よろしからざるとにより、桑葉少く、初めはモギ一貫目五錢八錢等唱へしが、今日は十錢より十二三錢位なるべし。

銀行を休みて組合へ行く。第一工場タンク修繕を見る。此タンクは毛賀城のもの等は皆第一工場を設備をなして、他に移転説等起らざる様設備せんとして、オサ／＼怠りなし。其結果水路に土管を布設せせり。午後一時より惣代会を開く。集合多忙の季節なればよろしからず。小会議に於て提出製糸部決算案の如きは全部承認をなし、費目に付て説明あり。旅費及び役員報酬に付ては半沢徳三より質問あり。予は現専務は名誉職にて日勤し居れり、前には有給にしても猶且多額の費を懸けたり、故に此位は御奮発を願ひたし。午後四時無事閉会して、決議録の草案を見て検印し、小会議中の記事は別冊とすべき事を命じて、

午後七時帰宅。

銀行と組合と比較して、銀行は権謀術数を以て気持悪けれども、組合は道徳的にして大に心地よろし。

発信 信也、下田氏に礼を云へ。

六月三日 水曜

晴。特別戸数割賦課に関する村会開かれ、午前九時役場行。午前中協議会として等級の序列を決し、午後は欠席す。

組合本所に至りて木下房吉に、彼か自己の組合よりの借金の証書を無効のものを差出し置きたるを清水発見し、之れが組合外に洩れたれば、房吉をして支所に転勤せしめんと謀り、其旨を房吉に告げたり。

終つて午後一時銀行へ出頭す。安田B危しと云ふ宣伝東京にあり、安田Bも大に警戒を散々したれば金融の途堪へんかを憂ふ。若し果して然らば、将来由々しき問題を惹起すべしと慮る。山本組合より久保田専務来行し、煮繭機の話あり口を聞く。北条某に電話にて話せり。松本へ片桐言渡ある筈にて出張の事に決す。木下六郎、羽根〔根羽〕の南へ住宅を新築したれば、其新築祝の宴に招かれ午後七時出向す。金一円、信水将軍の揮毫を贈る。

予記 モギ、桑一貫目十二三銭より十五銭。

【語句の説明】①特別戸数割賦課：町村財政における中心的位置を求めた戸数割賦課は、一九二六年の地方税制改正により、それまでの府県税附加税から特別税戸数割として独立税となった。同税は戸数を基準として賦課されたが、賦課額は各戸均等ではなく、市町村内の資力等によって等級が定められた。賦課額の算定標準については、毎年または毎賦課期ごとに市町村会で審議するところと、算定に關

する戸数割条例を定め、市町村長が賦課額を算定するところがあつた。

②煮繭機：しゃけんき。煮繭（しゃけん）とは、繭から生糸を繰糸する際、繭糸のほぐれを良くするために繭を煮て繭層のセリシンを膨化溶解させる準備工程のこと。煮繭機は、一連の煮繭作業に必要な操作を組み合わせて装置化したもの。

③信水将軍：堀内文次郎（号は信水）（一八六三～一九四二年）。明治大正時代の軍人。長野県出身。「陸軍省沿革史」を執筆。一九一六年陸軍中将。

④揮毫：文字や絵をかくこと。染筆。揮筆。

六月四日 木曜

晴。片桐の公判決言渡あり。松本裁判所へ行く。朝六時十四分八幡発にて出向す〔中略〕。又山林売却に付ては片桐石太郎等の好物付きまとい居れば、之をさけて木下作治を頼み材積の調査をなさしむ等の話をなし、再び乗車して松本行。

車中木下信及松沢茂雄、芝原校長、太田正夫など居合せたり。松本裁判所を訪ひて（押取株）仮還付の話をなしたるに未だ庁議決せされは、何時還付出来るやも計り難し。併し銀行の事情はよく熟知し居れば、何とかして早くできる様にするとの話なりし。之を拝す事も出来ずしに帰り、電話を以て仮還付早進運動を小穴弁護士へ頼む事として小穴氏を訪問したるに、委任状を見て副委任の形式なき事、犯人より控訴棄却の声明をなさしむる事等、其他手続上に関する注意を得、猶且早進運動を頼みて帰る。午後八時半飯田着。

予記 日本生糸会社、永嶺稲田氏等来訪し、仙寿楼に於て歓迎会あり

たり青山を山出向せしむ。

【語句の説明】①文晁…谷文晁（一七六三～一八四〇年）か。江戸時代後期の画家。狩野派、土佐派、西洋画などの手法をとりいれ独自の画風を創出。尚、この語句は〔中略〕中に出てくる。

②伊那銀行…一八九七年八月創立。一九四〇年三月に信産銀行、百十七銀行と合併して飯田銀行となる。①に同じ。

③芝原校長…芝原彦十。長野県立下伊那農学校長。

④日本生糸会社…日本生糸株式会社。

六月五日 金曜

晴。銀行へ出勤し焦梧堂へ日本生糸永嶺氏を訪問す。湧川、石橋等の店員随行せり。永岑氏に思想史一部贈置せり。牧野貫治来りたれば残りて、伊那社の役員を辞して清水会長を平野に改めるより外なき事を議す。

銀行に返りたるに頭取より店頭に表示して行務を見るべしとの事に付話あり。又郡農会に付話ありたるも予は之を止めしむる事に尽力せり。其結果平野を訪問し、原貞と同所にて平野を郡農会に推す事に約決せりとの事なり。養蚕四眠中、桑葉高き由を新聞に伝ふ一貫目モギ拾二三錢より拾五錢位なり。

六月六日 土曜

晴。降雨少く漸く初夏の気候となるを覚ゆ。一般に冷気勝にて人心不安なる時は天も亦変動なるは歴史の証明する処、本年の如き然るべし。共産党事件、官吏減俸事件の如き人心の悪化を語る最も顕著なるもの。

組合支所にて小林清次郎に面会す。彼執拗に田地担保にて借金を申込来り、之を断る。松田来り、又之と面会して機械繰糸の採用せざる可らざる事、統一の必要等を力説せり。青山専務より蚕種家を歴訪視察する旨通知あり、之を見る。予め相談なし。又事務員製糸部賞与原稿を示し来る。小部の訂正をして返送す。

上飯、銀行出勤す。大平発熱するとて欠勤す。彼何の経緯なく、銀行の頭取として順風に棹し来りたるも、此財界の風波に会いて急〔忽〕ちヘキエキ〔辟易〕し、家へ帰つて伏す。事の艱難に会て始めて丈夫の志を知る事が出来る。竹村兄及清男来りして千葉式煮繭機及借入金に事について話をき、やりたり。煮繭機設置に付ては北沢代理店と予か話して口をき、やりたり。

予記 村田屋を訪問し、変造公債証書を受取り酒を売りたる事件に付見舞をなし、⑤を近すくる事は禁物なりと進言せり。

受信 下田文一、信也の事。

【語句の説明】千葉式煮繭機…一九二七年に千葉壬驥が開発した煮繭機。日本最初の進行式煮繭機で、多条繰糸に適した蒸気煮繭法を確立させた。それまでの湯浸透から蒸気浸透法にしたこと、一回ごと煮繭むらが無く煮繭能力が向上したことなどから、当時画期的な煮繭機として全国的に普及した。

六月七日 日曜

晴。初夏の如く暑し。

朝六時に支所へ。組合の役員及蚕種家集合して村内蚕種家及養蚕の状況を視察す。蚕種家よりは石原、畑中、保阪等参加せり。上溝、木下富太郎より始めて順次廻りて、午後四時毛賀にて終り、後三、四の

もの毛賀タヤの養蚕家を巡視せり。毛賀にて金井技手と同行する事となりて毛賀を視察するに、一般の蚕況極めて良好の如し。蚕種家の原種として欧九、欧一七号、同一四号等あり、又支四号、正白等もありたり。特に奥田にては新店敷を造り庭園を造り等して豪華振を發揮し居れり。

夕刻疲労して組合本所に帰り、夜に入りて帰宅す。南信倉庫重役会ありたれとも欠席す。電話にて正午頃召介せしも未だ始まらされは如何ともし難く欠席す。減資問題如何に成行きしか不明なり。社会の今日 司法官の減俸不賛成。

【語句の説明】欧九、欧一七、欧一四号。支四号、正白等：いずれも蚕品種名、欧は欧州種、支は支那種の略である。正白は長野蚕試に育成された日本種で、主に昭和初期に飼育された。

六月八日 月曜

雨。組合支所に至りて青山専務を待ちしが来らず。塩沢新九郎に面会して種々話し、十時銀行に向ふて去る。

銀行にて金田より、日本の財界の大変動一改革ありて只皇室のみ残り一新紀元を劃すべしとの説あり。予も亦、彼の革命的財界の変移説には首肯すれども、然らば何時頃其の革変の到来するやは明かならずと話し合へり。銀行の問題は、急を救ふには銀行の合併、株式の交換等あれども、其れを実行するの機は既に逸し、各自行の生命の一刻も長からん事を努むるあるのみ等金田説を聞き、予の合併即「促」進説も種彼の説に退きたるが如し。銀行にて喬木館来行し、資金を求めたりしも、昨年已に三万九千円を損したれば、猶之を援助するは不可能事を責むるのみと、二十年來の得意に対しても時無止むを得不得る事なり。

中原、上京の由聞く。彼か東京行は軍人分会の乃木勅語の事なるべし。宮沢弼を呼びて、伊那銀行より借入れたる二千元を公債を売りたる金にて代弁済をなせり。

【語句の説明】①喬木館：喬木村の製糸業者。一九一四年に松尾村に蚕部を設け、蚕種を製造した。一九三七年に大龍社（下伊那蚕種共同施設組合）に参加した。

②乃木勅語：一九三一年三月、森本洲平が副会長を務める「帝国在郷軍人会下伊那聯合分会」の名で、かつて乃木希典が書いた軍人勅諭を複製した『勅諭』が発行されている。

六月九日 火曜

晴。組合支所より本所に立寄り、木下房吉より彼が二三日考慮さしてくれと申込たる彼を支所製糸部主任書記に任する件は、彼より然るべく頼むとの返事あり。

之を聴きて、川路行田中太三郎の病氣を見舞たり。田中は、銀行の営業の難と、今後合併するか又は解散するかの岐路にある伊那銀行を双肩に荷ひ、それが為に病氣となりたるものにて、老体なれども稍病氣全快の模様にて顔色よし。彼は、銀行の営業の利益減の事より歎声を洩せり。

午前十一時帰行してありしが、竜門和尚来行し、池田寿破産の旨を告げたるを以て、共に池田を訪問して閉店、上京の非を説きしも、既に決意の後にて何の効もなし。伝道講の事も話あり。粥川氏に頼みたりとの事なり。安田Bを訪問して、森部常務取締役来飯に付、其歓迎法方〔方法〕等を協議せり。放課後、支配人の銀行内の経営に付話して、野球を見て帰宅す。中原上京し、面会出来ず。彼か雄弁と書生論

は天下の雄にて思想亦堅実なり。

社会の今日 官吏の腐敗、労働者の台頭、革命来るべし。

六月十日 水曜

曇小雨。組合支所を経て上飯した。組合では、専務と製糸部役員賞与八〇〇円の分配案を立て、本日中に分配の手配すべき様命して置いた。木下六郎に、本所へ行き帳場主任を司る様内命し、市村には、支所帳場主任をする様に内命を下した。尚十七日より更迭すべき様にも話した。金井警察署長が上諏訪へ転任したのを駅に見送った。

又午後二時三分に安田銀行常務森部氏来飯したので、駅頭に出迎へた。森部氏は支店巡視の為来飯して、支店を見て当行に來り、茶接待をして、予は之れか案内役として松川橋に元結原紙会社を見、次で喬木館養蚕部に案内したり。松尾組合も視察する筈なりしも、中止。天龍峽に至り、龍角峯の上より天竜峽を見て絶景を賞し、龍峽亭に茶を喫し、ホテルに入りて、大滝、内藤、両氏と共に安田B行員三名を招きて、大平頭取と共に晚餐を供し、資金借入の運動を行ふ。

六三、一九両銀行合併の発表あり。大ショックを与へ、頭取、金田等と糾首して其の動搖を憂ひ、且又此成功を羨み、今後当行として如何に進むべきかに付研究せるも、頭取は無策、予は有策なるも之を行ふの方なし。金田より種々批評をうく。連合分会より乃木將軍の勅語の配布あり。

【語句の説明】①金井警察署長：金井仲次。警部兼属。伊那警察署長から上諏訪警察署署長へ転任。

②元結原紙会社：飯田元結原紙株式会社のこと。一九一三年に元結業者たちによって設立。上飯田町松川橋付近に工場を持ち、飯田元結

原紙の全てを製造した。

六月十一日 木曜

曇後雨。養蚕出合六日目なり。下男充分に飼養し一任せり。経過良好なり。

銀行の資金状態、預金の減額に比して貸付の回収なく、固定貸付も亦多し。依て百万資金の借入に付て心配せしも、頭取は何の銀行経営に就の能力なく、徒に戸位素餐せるのみ。予も亦理論すれとも実行力なし。資金涸渇して命旦夕に迫れりの報をうく。何とか銀行に一生面を開かされは制限支払をせざる可らずとあやしまる。片桐事件以来心にかゝる事のみ多し。

朝直に銀行に出勤すれば頭取既に出勤し居りたり。木下信來行して、入担の伊那B株式を売却し貸金に充当したる上不足額を井口好太郎に支払命令を付したとて怒つて來行し、予は之に面接して無償返還の出來ざる旨を告げたり。彼赤怒〔赫怒〕して去る。

予は電話を以て下田に大衆新聞に出たる記事に付取消方申込ましむ（大衆新聞には郡費を以て勤労党を作つたとの記事あり）。中原に電話を以て聞及ひたり。

安田Bを訪問して内藤氏に打合せ資金借入を頼む。

六月十二日 金曜

雨。組合支所にて井深に職掌異動、事務員移動の件につきて申渡す。木下房吉を製糸部主任書記として木下六郎と移動せしむるに付、木下房吉と協調して事務の進捗を計るべしと告げ、木下六郎、市村にも同様申渡せり。

後、上飯、銀行出勤す。大滝安田支店長来訪せり。頭取、伊那電上京せり、不在。勸銀総裁馬場鏝一來飯に付、当番、安田と打合をなす。座光寺氏より勤労党の事に付十三日夜中原宅へ来られたしとの話ありしが、馬場総才来飯に付出席不可能なる旨を告げたり。吉野福一へ、来飯、面会の由に付喜ひて面談し度と申送る。

中原、民政党を脱し勤労党を組織すとて各新聞に書立てたり。目下政界に一シヨク(シヨック)を与ふ。其の蔭に予が居りて策謀しつ、ある事等も報せらる。大衆新聞は作興会青年指導が勤労党製造につくしつ、ある事等見当違の報導(道)をなせしに付、之を取消すべく下田に申付く。夜に入りて福住来訪し洋服を持参して、初着して見る。予記 銀行の方の心配多く、好きな思想の書も読む事能はず。聯合分会発行軍人勸諭一部買受く。

発信 吉野福一。

【語句の説明】馬場鏝一：一八七九—一九三七年。貴族院議員。横浜税関、韓国統監府での財務経験等を経て、法制局長官に就任。一九二七年一〇月より日本勸業銀行総裁。

六月十三日 土曜

晴。組合支所を経て上飯す。組合にては来る十四、日曜日を利用して農会技術員塩沢治雄と共に村内養蚕家を廻覧する事を約す。青山専務とは十五日夜役員会及事務打合会を催し、終つて事務員其他従業員に一杯奢る事を約せり。

飯田にては午後六時大平越にて勸銀総裁馬場鏝一來飯する筈にて、之れが歓迎会を銀行同盟会及商業会議所主催にて行ふ事を約し、蕉梧堂に放課後馬場総才を訪問し名刺を通して面会す。午後七時より仙寿

楼に於て歓迎会あり、頭取及予出席す。馬場氏は世界的不景氣を話し、尚六三、一九兩銀行の合併の最も機宜に適したる事を喋々述べたり。之によりて彼が此合併の利益を述へ其宣伝に來りたるもの、如く、一語農工勸銀の併合に及はざりしは面白からず。随行として佐藤松本支店長、秘書一人、池浦も來り、会するもの三十四名にて、原幹事長は小西、北原等と勸銀が取立を此不況に際して行ふは当を得ざるものなる事を陳情せし由。之に対して彼は、好景氣の時の用意なかりしを説き逆襲せり、と。予も盃を持して勸銀総才の前に行き、志村氏の徳をた、へ、揮毫を頼み置けり。頭取に合併論を大蔵省及日銀支店等へなすべき様勧告せり。

六月十四日 日曜

晴。朝七時組合に出かけ支所より本所行、本所にて木下房吉を製糸部事務部長に任す。木下六郎を本所事務部長、市村を支所事務部長に命する辞令を作らしめたり。伊那社技術員代田氏来組し居り彼と塩澤治雄と三人にて毛賀、清水、代田等の蚕況視察をなす。午後五時迄なして帰宅す。

蚕況は食迎七、八日目最も多く清水、城地方には上簇したるものあり。本月六、七日頃の桑高の評ありしも却て今日は安く一貫目大繁五、六錢、四方咲七、八錢なり。

途次大沢茂尾女史を病床に訪問したり。彼女は一ヶ月来肋膜腹膜にて病床し居りたり。椀屋に蕁栽培の有利なる事を説けり。帰宅すれば吉野福一來訪して勤労党の話より始めて、彼が教育者として立つて付き此際一身上の進退に付相談あり。

予は老父の在世の間は其俣に過すべしと告げたり。共に夜に入り上

飯、大横町中原宅に於て座光寺、吉野、田中、会合して邦文堂の後即ち信濃朝日新聞社の残印刷道具なるに付之を買入れたし。価は千三百円と唱へ居るも千円位にて買ひ得るとの話あり。予は、事業は人なれば吾等の同志其経営に当り得る人ありや、器械は次なりと論して、猶興社印刷所の持株に付話したり。夜十二時過帰る。

社会の今日 春繭東海道辺二円七、八十銭なり。

【語句の説明】①上簇：じょうぞく。成熟した蚕を、繭を作る場所である簇（まぶし）に入れること。

②肋膜腹膜：肋膜炎及び腹膜炎のことか。肋膜炎は胸膜炎とも言い、胸膜に起こる炎症である。腹膜炎は、腹膜に起こる炎症のこと。

③信濃朝日新聞社：「信濃朝日新聞社」という新聞社は存在せず。東

京朝日新聞（東朝）の長野支局のことを指すと思われる。東朝は一
九二一年頃に長野県に支局を設置して「信濃版」という附録をつけ
るようになっていた。

④春繭：春期に飼育した蚕児の繭のこと。夏秋蚕の繭に比べて優良と
される。

六月十五日 月曜

晴。世界的不景気米国の不況等にて春繭安く二十二、三掛を唱へ春蚕気込悪かりしも、幸に養蚕は好結果に進み違蚕等少し、桑畑を田に掘りなかしめるべく宣伝するも百姓はコンナ事のみはなかるべし、何とか二、三ヶ月経はなるべし位の勘考にて桑畑を田とするもの少く、松尾村に於て一割位なるべし。

組合支所を経て銀行へ出勤す。銀行にては頭取を合併論を速進せしむべく松本へ送り出したり。頭取近來銀行の苦況を気にして顔色焦粹

〔憔悴〕せり。放課後組合に來り役員会を開きて信用貸付金利子引下を七月一日より実施する事とし、其他事務員移動に付て報告せり。

終つて事務員会を開き新年度の事務打合を行ひ牛肉酒を振舞ひたり。上簇最盛期にて来会する理事少数なり。

社会の今日 桑モギ一貫目七、八銭に下落す。

六月十六日 火曜

晴。上飯して銀行に出勤す。春蚕上簇の為稍遅れて出勤す。頭取松本長野行より帰行し居り、二階の重役室に於て松本日銀支店長との会见の模様にて話あり。伊那地方銀行合併談は却て自行の苦況をハク露するに終り、最後の合併をしてもよき案を出して見よとの事を引受けて、知事迄は行かずして帰り来れる由を聞く。金田も同席し、最後の肚として悪戦苦闘を試み精勵努力して此難局を打開するより外なく、悲鳴を挙ぐるは百害あつて一利なき事に決し、表面を糊塗して時期を待つより外なし決心せり。

山本村玉置勝人に猶興社綱領等を送る。駒場支店長矢沢共一より送られたる原蓬山の画を床上に掲げて其輕妙なる筆致を見る。養蚕上簇して二階に入れ終る。下男久男多くの虫を入れたり。父終日家居して書見せるも、元氣よけれとも身体は老況に入り衰へるか如し。矢澤駒場支店長原蓬山の山水画を贈られたり。

社会の今日 朝鮮総督宇垣氏拜命。

【語句の説明】①原蓬山：南画家、一八二三～一八七八年。伊那郡上清内路村に生まれ、一八五六年に京都へ出て谷口諱山に入門。帰郷後は東洋画の技法も学びながら、知人に絵をわけた。清貧に甘んじ、屈託のない山水画を残した。

②宇垣氏：宇垣一成（一八六八～一九五六年）。清浦、第一次加藤、第二次加藤、第一次若槻内閣および浜口内閣の陸軍大臣（一九二四～二七年、二九～三一年）。この年の三月、陸軍内部が宇垣を擁立しクーデターを行う計画を立てたが結果的に中止となった三月事件が発生。宇垣は四月に陸軍大臣を辞任し、六月に朝鮮総督に任ぜられた。

六月十七日 水曜

曇小雨。中原の民政党脱して勤労党を組織せる件につきて大なる峽谷の政治に衝動を来し、大衆新聞等は予が黒幕となりて策謀する等と宣伝し、尚作興会が其の党員を作る外廓運動である等論したり。

組合支所にて木下六郎と房吉との間に事務の引継を見んとせしも見る能はずして上飯す。銀行にて金田と重役問題其他に付話す。百十七Bの病弊の根源は重役か使用人任せの事なり。之れは重役か直接事務を担当し指揮して行務の進捗を測らされば将来当行の運命は知るべきのみと。此の意見に付ては予も久しく以前より其の意見を有し、大平氏に常に勧告し居りし処なるも、大平氏は単に頭取の椅子によりて俸給を得んとするものにて、今迄何等献貢する所なし。予に陣頭に立ちて衆を率ゐて商戦をせよとの事なりしも、自ら陣頭に立つの勇氣もなく、且又人柄にてもなしと辞す。

放課後和泉正実を風越館に訪問し其病を見舞たり。併して結核性病気の療法として灸をすゝめたり。

社会の今日 一般養蚕の結果よし。

受信 湧川。川口。

【語句の説明】風越館：飯田村の今宮公園に建てられた公会堂。

六月十八日 木曜

曇雨。朝雷鳴あり、気候一般に冷気なり。

直に上飯銀行へ出勤す。銀行の方は別に何の用事も現業に一任せり、大方針の決裁をなし進ましむるを予の用務とせり。

所得調査委員が調査会中税務署と打合たる減額協定に付、営業収益の減額を主とし土地収益は60%の減額を協定したるに拘らず、其減額の調定案の通りならざりしを詰問せんとして調査員百十七銀行樓上に集合し、午前十時より其態度を研究して税務署へ押寄せる協議をなし、午後税務署へ行き署長及課長に面接して「先般の減額協定の精神が税務所の決定に徹せざりし非を責めたり」。課長署長共に失格を口実として其の計算上出来ざるを主張して譲らず、遂に物分れとなりて仙安に引上げ、夕食を共にして午後七時予は先に帰る。銀行の方は午後休みたり。

近來心労のみ多くして仕事意の儘に進まず。勸業銀行の召宴に出席の旨を答へたり。

六月十九日 金曜

曇。銀行の預金の引出。貸付の固定等憂慮すべき状態にありしが安田Bよりの借入金五十万円となり、又信聯等より現送として相当の資金流入する事となりて、金繰に支障なく行く事となりて万事樂觀的に向ふ。放課後仙安に於て勸業銀行の招宴あり。佐藤松本支店長来飯し、飯田在各銀行の頭取常務及支店長等を招待せり。盛宴にて御馳走になりて夜十一時帰宅す。春蘭本所へ百貫計り入荷始まる。

六月二十日 土曜

曇晴。組合支所から吉川芳太郎を訪問して、銀行から安田へ提出する引受約定書調印を頼むべく立寄つたが不在。止むを得ず立ち去つた。

野原弘一を訪問して綿半商店の借金整理を如何にすべきかに付て、弘一氏に談つた。弘一は予の訪問を以て手厳しき債促なりと早合点したるか容易に出で来らず、一時間半も俟ちたる後、漸く立ち出て来りて面会し、喬木館製糸部の借金の事から親類会議の事等と話し、四日間に互りて吉澤が親類を集めて会議し、漸く親類の調印を得て営業を続行する事となりたる事、及百十七へは年額二千円の金利を支払ふ事、新資金は繭担保にて願ひ度事等の話の末、綿半の事は最低家賃として通帳を以て払込む事、大久保の地所は売却し元金へ入金し度き事等の話ありて午後二時銀行へ返る。

吉野来行し猶興社出版部に付、予の意を問ひたれば左の如く答ふ。猶興社は経営中心人物が主となり営業費は出費する事、同志は醸金して器械を買入れ、之を経営者に買はしめ若干の利子を党の資金として積立つる事等と話し、後放課後中原宅にて吉野、座光寺、粥川其他二三青年と会して予の意見を話し、器械所有者小平氏に金千円を以て買入れの事、電気料屋賃などを清算する事等を計り、又資金募集を計て片桐寿と会して猶興社と勤労党の事を話す。

六月二十一日 日曜

快晴。初夏の気満ち、日濃く当り、暑気強くなる。

日曜日なれば休養すべく決心して長椅子の上に横はる。子供等を相手として庭掃除をなす。曾て買ひ来りたる洋菓子を家族集まりて茶を呑み披露せり〔後略〕。

午後、伊那社役員会あり出席す。役員会は蚕種同業組合より申込ありたる蚕種代価決定及集金等につき伊那社へ申込ありしに付、其対策及其他に付、別に重要な事項にあらず、平野・清水等と話して横浜仲買人の資産状態の危機にある事等に付、話をなす。会議の終末を告ぐる頃を見計らいて、予は先般の総会に於て決したる役員減員の件を持ち出し、原唯市、其他賛成ありて臨時総会を開きて役員総辞職をなし、役員員の減員をなす事に決したり。後、蚕種家と協同して懇談に移りしか、予は中途にして帰る。伊那社役員会は最も巧妙に仕事出来たり。テンカラに行き五尾を獲て帰る。

予記 繭入荷組合へあり。

【語句の説明】テンカラ：テンカラ釣りのことを指すと思われる。

リールを用いず、テーパーのついた編み糸の重さで毛針を飛ばし、イワナ・ヤマメなどを釣る方法。日本の伝統的な毛針釣り。

六月二十二日 月曜

晴曇。組合支所を経て銀行へ出勤す。

六月二十三日 火曜

晴。組合支所より本所に至りて繭の出荷状況を見る。松島乙次郎受入主任として来組し居り、彼と話す。乾燥場等の状況を見て後、上飯せり。

青山専務と組合仮渡資金の事に付て打合せをなす。銀行よりは投資は出来ず、去りとして投資せされは、又如何とも致しかたし。其の謝絶に困り、金田をして之に当らしむ。銀行は信聯より現送を委託せられて其の資金によりて辛ふして営業を継続するを得たり。此点は幸運な

りと云ふべし。

粥川より勤労党の印刷所問題に付ては請判は断る旨申来れり。

六月二十四日 水曜

雨。組合支所に立寄り、春繭出荷状況を視て後上飯、銀行へ出勤す。予は今来頭の中がムシヤクシヤして鬭争性となり、六ヶ敷顔色して食ふてか、り度き様な気分せり。人に親切なる事や人に愛敬をうける様な気分はせず、徒に人と鬭争性に富む気分となる。殊に午後になりては胸中睡気甚しく、午後疲勞甚し。

松田が曾て酔後、予に忠告したる言は胸裡に沁み亘りて今尚常に考へさせらるゝを覚ゆ。君に対して敬意を表するものなし、山本から養子に來りやがつてアンナへボ男はない等世間は君の事を言ふて居るぞと。此言は予の心況に常に往來して止まず、銀行も財界不況の際、金利集まらず、徒に心を勞すれとも如何にもすべからず、百十七銀行も若し此下半年に於て局面の転廻を計らされは將來如何に成行くべきか恐ろし。

税務署より調査委員手当を送金し來り受取る。

社会の今日 米国大統領フーバー獨に戦債一ヶ年免除を声明し財界活況を呈す。

六月二十五日 木曜

雨。組合支所へ出頭して繭入荷の状況を視た。昨日迄の本支合計一万六千貫を超へた。

次に銀行に出勤した。今日は百十七銀行にとり又予にとりても重大なる日であつた。放課後、課長會議を開いて大平頭取から一^{マビ}当行て

は以来重役は余り行務を見ず、行員に一任して置いて重役は遊戯的に銀行をやつて居た。然るに時代は既にそれを許さない様になつて、重役自ら陣頭に立たなくてはならぬ様になつた。財界不況の折柄、重役自ら事務を見るから宜敷と挨拶あり。後藤は来る七月一日より各課の事務を放課後一覽したいから其積りてやつてもらい度いと話、今迄百十七Bの世評は重役が遊び半分に仕事をして居た点にあつた。之から暫くの間はヘマはあるが一つやつて見るから諸君も精勵すべしと告げたり。之にて重役が行務を見る事となり、予の決心もつきたり。併し予は金貸の如き商売は好む所にあらず、機を見て勇退せんと心ひそかに思ふ。

組合にて役員会ありたるも欠席せり。仮渡金貳円五十銭とする事に決せる筈なり。

予記 午後睡気甚しく胸裡心地よろしからず。

社会の今日 フーヴァー氏の戦債モラトリアムの結果米財界活況。

六月二十六日 金曜

雨晴。組合支所を経て本所へ春繭受入の状況を視るべく行つた。昨日今日か受入の最盛時で本所四千貫以上の入荷あり。合計二万貫にも及へり。青山より昨日の役員会の模様を聴取したり。米国風馬の戦債モラトリアム声明以来、綿糸・生糸・米皆暴騰を演じたり。鈴木和蔵に米式百俵売却す。代は一駄に付、金拾参円なり。相場としては上等の方なり。

銀行業務に付、昨日重役が業務に専念すべき事を各課長を集めて声明せしを以て、今日より事務を見る事とし、先づ貸付を帳簿によりて見、且つ、調査材料等につきても一一目を通す事とせり。頭取も今迄

遊戯半分に銀行に通ひて給料取をしたる事に気付き、鋭意行務を見るが如し。予は、銀行が金を貸せるより貸金を取立てる時の苦痛を知るが故に、銀行は面白からざる業なりと熟々考へたり。

放課後、中原、吉野、座光寺来行して猶興社出版部に付て話し、猶勤労党の件につき結党式を何日とすべきや、鹿子木、平田等を招して政談大演会を為す等につきて諮る。

予記 朝早く丸山幸治来訪し、亡鶴吉の百十七Bに対する貸付に付て問合に來り。一一説明して利子を払込むべく話せり。

発信 蘇峯書の礼。小林八十吉、愛児喪失の慰。

【語句の説明】①鹿子木：鹿子木員信（一八八四～一九四九年）。大アジア主義の思想家。大正期以降、更生して独立の運動を起こすべしとする大アジア主義の思想運動を推進した。一九一九年に成立した北一輝、大川周明らを中心とした猶存社に参加した。同社解散後、九州帝国大学法文学部教授に就任。昭和期は新日本国民同盟、大亜細亞協会の顧問、理事などとして活動。戦後、A級戦犯に指定される。

②平田：平田晋策（一九〇四～一九三六年）か。ジャーナリスト。一九二〇年代初頭に暁民共産黨員として活動し、逮捕、禁固判決を受ける。一九二九年に政教社に入社。同社編集部長。

六月二十七日 土曜

晴。組合支所に行き、青山に面会して受入状況を聞くに昨日は廿五日に比して大に減少し、本年の春蘭受入量は昨年約四万二千に比し約一割五分減なるやを察せらる、旨報告あり。

一巡して上飯す。銀行にては取締役会を開き、吉川・井村来行して

営業の状況より其他決算予想等報告し居りしが、ラジオにて日銀新株払込より増資説を伝えられ、一躍八十円高となりたりとの吉報あり。

吉川氏愁眉を開きたり。之か真なりとせば、現政府も日本銀行を増資しては兌換券を多く発行し、公債募集に代ふるには兌換券を以てするの政策をとりしなるべく、不況も之を以て一段落となり、之より財界好転せんと思はれたり。終つて仙寿楼に於て夕食を喫して帰宅せり。

龍門寺を上飯の途中にて訪問すれば、和尚予に紫野伝衣室の書を示して買へと云ふ。辞して去り、田中清より頼まれたる七月一日午後寺の一室を借りる話なし置けり。

共産党事件中心の公判開かる。

予記 生 玉蘭一貫目 二四〇。上蘭 ヶ 三〇〇。地 米一駄 忒俵十三円。生糸 五一〇が六六〇に暴騰。

社会の今日 フーバー景気にて増々好況。

【語句の説明】①玉蘭：二頭以上の蚕がつくる繭のこと。よじれて粗悪な糸が多く、良糸を得ることはできない。

②上蘭：上品、良質な繭のことか。

③日銀新株払込：日本銀行は、増資を実行し日本銀行券（兌換券）の保証準備発行制限を拡張するため、未払込株金を株主から徴収することを決定した。

六月二十八日 日曜

晴時雨。今日は期末の日曜日であつたが、銀行も忙はしい事は承知したが、先づ組合へ行つて見る。伊原キノの遺産である土地が相続人がなく、且組合へ抵当に入つて居るので之を競売すべく決して才〔裁〕判断から実地を見に来たので、之に伴ふて案内して八幡原のや

せた畑を見た。坪五、六十銭のものであつた。

組合製糸部始業に、朝第二工場に一場の話を工女に対してした。其要旨は組合の製糸は原料・技術・協力此三者が出来たならば必ず好成績である旨を述べた。併して書記の移動、工場主任の移動等につきて報告し、試験課の井深兼務も話した。又器械繰糸の人員、職工を減せざる点等も話した。

午後三時、龍門寺和尚を招いて茶を喫し、坐敷で話して後、鳥清の坐敷新築祝賀会に応招した。大平重太郎、吉川芳太郎、竹村順一、八幡の主要なる人物も居合せた。夜十一時、酔ふて帰つた。

予記 組合製糸部始業日銀新株払込五〇円来り。政府の財政策分明となる。

六月二十九日 月曜

晴。組合支所て工場を一巡し、小原理一が伊原キノの土地を競落したいと云ふので、二百二十円で競落せしむる事とした。

午前十時、銀行へ出勤す。佐々木、野原、番頭を招致して其金利支払の事に付て交渉したがまとまらなかつた。頭取は伊那電總會へ出張し欠勤した。伊那電總會の伊那電の経営も伊原の拡張主義、他のボロ会社買収主義の下に困難に僅に三朱の配当をする。一日事務を掌執したが、金利の回収は最も困難とする処であつた。石川から為替の報告があつた。彼は業務を熱心によつたが、銀行自体の信用が薄いので困つて居た。日銀の増資問題に付て、銀行の持株の騰貴はあり。此後相携て好景気銀行経営の順潮に竿さした時、嬉し涙に咽ふ時の至るを待つた。金田もよく其の心中を予に話した。

六月三十日 火曜

晴。直に上飯、銀行へ出勤した。半期決算期にあるので、朝から店頭賑であつた。フーパー景気で生糸、株、米共に暴騰し、商人も農民も共に明き気分となり。利子の集金予想外によろし、北原団蔵、北原源三郎、上松彦太郎等来行し、面会せり。湧川泉次郎商用を以て来行し、面会して夕食を仙安に於て共に食し、彼に饗応せり。話は生糸売買に関する事より、堅く商売をなす事、為替は多く付ける事等を話し、横浜の生糸市場の閑散なる事及正金より金の出である事等の話あり。伊那社も清水の問題等もあり、却て横浜の方が当地よりも組合の話等はよく判明する話をなせり。夜十二時迄居りて、店頭の状況を見たり。帰宅すれば午前一時なり。

愛国運動を放任して商売の道に入れば面白くなき事のみ多く、不快なから此んな事をして人を偽瞞して渡る世の中なそ予の最も厭ふ処である。なせこんな事を浄化出来ないだらうか。